
不思議の世界のナギ？

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の世界のナギ？

【Nコード】

N4104I

【作者名】

不知火

【あらすじ】

不定期更新

ナギが目を覚ますと、自分の元居た世界とは別の世界パラレルワールドに飛ばされていた。

元の世界に戻るのか、それともとどまるのか、ナギの選択はにかに？

キャラ崩壊がふんだんに盛り込んであります。

2 前書きには高確率で本編と関係のない作者の戯言が掲載されております。

3 だんだん設定ぶれてきましたww

4 ぶっちゃけハヤテのキャラは大体妹が作ってます(^ω^ ;)

第一話（前書き）

まだまだ下手ですが、よろしくお願いします。

第一話

今にも雨でも降り出しそうな曇天の日曜日、広い書庫の中でナギはとある本を探していた

なぜナギ自身が探し物なんてことをしているのかというと、この日は彼女の執事である綾崎ハヤテとメイドのマリアの二人は三千院家からの呼び出しで本宅に行ってしまうていて居なかった（と言ってモナギがついて行かなかっただけ。）からである

「はあ……こんな時に限ってハヤテとマリアを呼ぶなんてじじいのやつ……どうせたいした用もないくせに……」

膨大な量の書籍に囲まれて一人寂しく少女はポツリと呟いた後、再び作業を開始した。

「これでもない……これも違う……」

本棚の本を右から順番に確認していき、目的の本で無ければ次の段へと進む

この単純明快な作業をひたすらに繰り返すこと一時間。本棚の上方から確認していったナギはついに下から二段目で自分の目当ての本を発見した

「お、あつたあつたこれだ！」

目当ての本をようやく見つけたナギはすぐさま本をとろうと軽く引っ張ってみたのだが

隙間無く埋まっていた為か、簡単に抜くことは出来なかった

「うーむ……抜けないか。」

ナギは一度本から手を離し、一呼吸を入れてから

「燃えろ！私の中の小宇宙！！」

どこかのペガサスっぽいファンタジーなセリフと共に本を思い切り引っ張った

その行動が自分にとっての悲劇への引き金だとは知らずに

「よし！とれた！」

と本を抜き取り、無事に着地したナギが満足げな表情を浮かべているそのすぐ上方で、無理やりに抜き取ったため、それよりも上方にあった辞典などの厚い本がさながら雪崩のようにナギへと襲いかかってきたのだ

「……………！？」

途轍もない音を立てながら流れてくる本の波はナギに声をあげる間すら与えなかった

屋敷の外には雷雨の音が響き、部屋の中にはゴツという低く鈍い音が響いた

本の波はまだ止まらない「お嬢さま？こちらにいらっしや……………」

それから数分後、屋敷へと帰ってきて、姿の見えないナギを捜しに書斎に入ったハヤテは目の前の光景を理解するまで少しの時間を要した

何故ならハヤテの目に飛び込んできたのは、本に埋めつくされ僅か

に手だけしか見えていない自分の主だったからである

第二話

コンコン

「お嬢さまーそろそろ起きて下さい。学校に遅れてしまいますよー。」

「

扉を軽く叩く音と扉の向こうから聞こえてきた執事の声が耳に届き、ナギは目をゆっくりと開けた

「（あれ……私いつベッドに入っただっけ……？）」

しかし、いくら考えてもナギには昨日自分がいつベッドに入り、そして眠りについたのかまったく思い出せなかった

だが、

「（……まあどうでもいいや……）」

襲い来る強烈な眠気に勝つことができないHIKIKOMORI気味なナギは自分の中だけで安易な結論を出して再びまぶたを閉じ、の○太君もビックリな早さで、心地よさそうに規則正しい寝息を立て始めた

それに対して予想通りに主が起きてこないことを確認した執事は、主の耳に届いていないことは知りながらも一応一言断りをいれてから部屋の扉をゆっくりと開けた

そして物音をたてないようにベッドに近寄ってきた

すうすうと規則正しい寝息を立て、幸せそうな寝顔を浮かべている主を見て微笑むとそっと自らの唇を主の頬に持っていき口づけをした

「かわいい僕のお嬢さま、おやすみなさい。」

そう耳元で囁いた執事の名前は綾崎ハヤテ

ハヤテは眠っている主を起こさないように静かに部屋をあとにしたそれから数時間後、白昼を少し過ぎた頃にようやくナギは目を覚ました

そしてゆっくりと起き上がり、ベッドに乱暴に寝間着を脱ぎ捨てて、適当な洋服を身に纏い、かなり遅めの朝食（ブランチ？）をとるために寝室から出ていった

「おはようマリア。もう朝食はできているか？」

まだ眠いのだろう、目を擦りながらナギはマリアのもとにヨロヨロとやってきた

「おはようございますナギ、朝食はありません。」

マリアはきっぱり言ってナギの表情を確認する

予想通りにナギが少ししょんぼりした表情を見せたのを確認し、ナギに気付かれないように少し恍惚の表情を浮かべた後、すぐさま表情を取り繕い

「朝食はありませんが、昼食ならあります。食べますか？」

と言った

少し皮肉が混じったその言葉に、ばつが悪そうにナギはうなづいて二人は食堂へと向かった

第三話（前書き）

短いですが、どうぞご覧下さい m — — m

第三話

「ハヤテは学校……だよな？」

朝食もとい昼食を終えたナギがマリアに尋ねた

「ええ、もちろんそうですよ。どこかのお寝坊さんとは違いますからね。」

「ま、まったくハヤテのやつ、私を置いて学校なんかに行つて……」

目をそらしてナギはマリアの少しトゲのある言葉を華麗にスルーした

「ナギを待つていたらハヤテ君が遅刻してしまいますよ。」

マリアが呆れてながら言うとなギは突拍子も無いことを言い出した

「そもそも学校が朝から始まるというのが悪いのだ。昼からだつたら私だつて休まず毎日行くだろっさ。そしたらハヤテと一緒に……」

ナギが言い終わる前に紅茶をいれながらマリアが割つてはいる

「ハヤテ君と一緒に学校に行きたいならお昼ではなくちゃんと朝に起きて下さい。生徒会長のハヤテ君は遅刻なんてできませんから。」

マリアはさも当然のように言い、ナギに紅茶を差し出した

「……………そうだな。」

ナギはマリアのいれてくれた紅茶を受け取り、口に運ぼうとしたが、ふと手を止めた

「……………ん？」

「生徒会長だ！？」

驚きのあまりナギは紅茶のカップから手を離してしまった

「あ……………」

気づいたときにはもう遅く、カップは割れて、紅茶が床に広がり始
めていた

「す、すまん……」

マリアに怒られてしまったらうなと思ったナギは俯きながら小さな
声で言った

「まったく……ケガはないですか？」

ナギは自分の手などを見て、ケガが無いことを確認し大丈夫だ。と
言った

「ならいいですよ。こんなカップくらい。」

それに対してマリアはナギに笑いかけてカップの破片を拾い始めた
「危ないですから後始末は私に任せてナギは部屋に戻っていてくだ
さい。」

「う、うむ分かった。」

これ以上自分がここにいても仕方がないと思ったナギは気になって
いた事も完全に忘れ、自分の部屋へとトボトボ帰っていった

第四話（前書き）

相変わらず更新は遅いのですが、どうぞお付き合い下さいm
—) m

第四話

部屋に戻ってきたナギはすぐさまベッドに飛び乗り、ドラ○エでもやるかとおつぶやいてDSの電源に手をかけた

が、ふとその手を止めた。自分は何か忘れている気がする。

しかもそれは自分にとってかなり衝撃的なことだったのではないか。そう思い、DSを手放し先程のマリアとの会話を順番に思い出していく

・朝食はない。

・ハヤテは今は学校に行っている

・ハヤテと一緒に学校に行きたいのならば朝早くに起きなければならぬ

・だが学校が昼に開始なら問題はない

・ハヤテは遅刻出来ない。何故なら生徒会長だから

「あれ……？」

『生徒会長だから』

「……………」

「なに——！？」

「何事ですかお嬢様！？」

ナギの叫び声を聞いて、すぐさま三千院家執事長のクラウドスがナギの所に現れた

何故かは分からないがナギのベッドの下からスッと現れた

「一体どこから現れてるのだ！お前は！！」

ナギはこれに対し、どこから取り出したエスカ○ボルグでクラウドを……

「で……どうかなさいましたかお嬢様？」

頭に大きなたんこぶを作った。というか作られたクラウドはナギに尋ねた

「そうだった！！クラウド！ハヤテは一体いつから生徒会長になったのだ！？」

ナギが驚き戸惑いながらクラウドに尋ね返すと

「お嬢様……一体何をおっしゃっているのですか？綾崎は入学して間もなく生徒会選挙で生徒会長になったではありませんか。」

クラウドはさも当然のようにナギに返す

「なんだと！？そんなはずはない！！」

ナギは声を荒げる。それもそのはず、ナギの記憶では確かに白皇の生徒会長はヒナギクであり

ハヤテにいたっては編入した身なので生徒会選挙には参加すらしていないはずだからだ

「お嬢様……やはりどこかお体の調子が悪いのではないですか？」

このナギの尋常ではない驚き方にクラウドは頭でも打って混乱しているのかと心配になるが、ナギはナギでクラウドがついにおかしくなってしまった。と思っていた

とそこで部屋の扉が開き

「何事ですか？騒々しい。」

割れたカップの片付けや洗い物などのもろもろの用事を済ませたマリアが部屋へとやって来た

「マリア！聞いてくれ！クラウドがおかしくなった！！」

「マリア！お嬢様の様子がおかしいのだ！すぐに医者の手配を！」

二人はマリアが部屋に入るなりいきなり、しかもほぼ同時に訴えかけたので、普通なら聞き取ることすら出来ないのだが

「なるほど。たしかにそれは変ですね。」

たとえ二人から同時に話をされても理解できるのがマリアのクオリティである

そしてマリアは

「間違ってるのはあなたです。」

と言ってナギを指差し

「紛れもなくハヤテ君は白皇の生徒会長ですし、あなただって白皇の副会長をやってるじゃないですか。」

そう告げた

「な！？なんだ……と……？」

当のナギはマリアの言葉がまったく理解できず、ついには驚きが大きすぎて動かなくなってしまった

するとマリアはピクリとも動かなくなってしまったナギに直接自分で白皇に行って確認して来るように言い、早速クラウスに車を手配させ始めた

第五話（前書き）

原作とは呼称を少し変えてありますが、そこはご了承ください m
—) m

第五話

「終わったー！」

ここは白皇学院の生徒会室

今し方声を発したのは学校の制服ではなく執事服を身にまとった少年だ

「お疲れ様です。会長。」

そう言つて生徒会書記 春風千桜 はホットコーヒーを差し出し、代わりに承認の印を押し終わった書類の束を受け取った

「いつもみたいにハヤテでいいですよ千桜さん。いただきます。」

白皇学院生徒会長 綾崎ハヤテは生徒会長のイスに座つたまま一口コーヒーを飲んだ

「うん。やっぱり千桜さんの淹れてくれたコーヒーは最高だ。これさえあれば僕は生きていけますね！」

「はいはい。ありがとうございますハヤテ君。私でよろしければいつでも淹れて差し上げますよ……あ！もうこんな時間だ！それでは私はバイトがあるので先に失礼しますね。この書類は帰りに提出しておきますから。」

千桜が時計を見ると長針は6、短針は4と5の間を指していた

「お疲れ様でした千桜さん。」

「「「お疲れ」」」

「また明日ね千桜さん。バイト頑張つて。」

ハヤテに生徒会三バ……三人娘こと 瀬川泉 花菱美希 朝風理沙
と生徒会会計の 霞愛歌 の四人が続いて言った

それに対し千桜は「それでは。」と返して荷物と書類を持って帰つていった

千桜が帰つた後、今度はハヤテと愛歌・三人娘の不思議な会話が始まった。

「そろそろ来る頃じゃないか？」

「そうねあと5分つてところかしら？」

「そうだ！ハヤ太君。あと何分後に来るか予想して一番遠かった人が帰りにジューズを奢るってどうかな？」

ニコニコしながら泉が提案すると全員がそれに賛成した

ちなみに予想はこうなった

5分後 愛歌

7分後 理沙

10分後 泉

12分後 美希

20分後 ハヤテ

予想を会長がホワイトボードに書き込むと五人は雑談をしながらあ
る人の到着を待つことにした

その光景を名付けるならば『駄弁る生徒会』といったところだろうか

それはさておき、雑談開始から7分後。突然生徒会室の扉が開いた

どうやら私の予想が的中したようだ。と理沙が言おうとした瞬間
に遅れてやって来た副会長は言った

「あ！ハヤテ君仕事もう終わっちゃった？」

と二人の副会長の中の一人 桂ヒナギクがゆっくりと入って来て、
さらに棒読みで続けた

「あれゝ？おかしいなゝこれでもけっこう急いだんだけどなゝ」

「よく言いますね。外のベンチに座ってずっとゲームしてたじゃないですか。ま、別にかまいませんけどね。」

というハヤテも怒る様子はまったくなく、むしろ笑っているくらいだった

するとヒナギクは

「ありがとゝハヤテ君だゝい好き！」

いきなりハヤテに抱きついた

しかし、ハヤテもまったく驚くことなくヒナギクの髪を優しく撫で始めた

「おゝいそこのお二人さゝん。ここは生徒会室だぞゝ！」

「早く帰ってこゝい！」

美希と理沙がハヤテとヒナギクに呼びかけたが、二人はまるでマ〇ーサにかかって周りが見えていないかのようにピクリとも反応しなかった

「無駄だよ美希ちゃん、理沙ちゃん、このパターンだと多分あと15分は戻ってこないと思うよ。」

泉は冷静にそう言つと自分の鞆から教科書とノートを取り出して自

習を始めた

「私たちもやるか理沙。」

「……そうだな。」

特にすることも無くなってしまった美希と理沙も泉に続くように自習をしていた

その頃愛歌は本棚から適当に取った小説『探偵ガリレイ』を読んでいたが

不意に携帯のバイブに気づき、確認してみるとメールが一件届いていた

内容を確認した愛歌は夜神さん家の息子さんのような笑みを浮かべ、
ハヤテをチラリと見た

一方のハヤテとヒナギクは

「ハヤテくゝん。」

「何ですか？ヒナギクさん？」

「呼んでみただけ。」

などと思わず何時の時代の掛け合いだ！といったツツコミを入れた
くなるようなことをしていた

第六話（前書き）

遅くとも着実に更新していこうと思います（＾Ｏ＾・）

第六話

ヒナギクがハヤテから離れるまでの時間は泉の予想を遥かに超えていた

二人が離れたことを確認し、泉はノートを閉じてから言った

「思ったよりもかなり長かったね……」

「愛歌さ〜ん。今日は何分だった？最長記録出たんじゃないか？」

そう理沙に言われて愛歌は小説にしおりを挟み、腕時計を見た

「えーと……36分と18秒。最長記録を2分と5秒も更新したわ。」

「

そう言われて泉、美希、理沙の三人は「はあ……」と一斉にため息をつき、愛歌は「私はもう慣れたわ」と言った

するとため息に気付いたヒナギクが

「どうかしたの？ため息なんてついて？」

と尋ねてきたのでイラッときた四人は思わず手が出そうになった

四人が生徒会室で怒りを必死に抑えている頃

ガーデンゲートの遙か下で金髪ツインテールの少女が神妙な面持ちで立っていた

ナギは自分の言っている事こそが真実であり、クラウドやマリアの言っている事が間違っている

それを確認するために生徒会室に向かおうとしていた

だが今、ナギはその足を止めている

何故なら不安だったからだ

クラウドやマリアが主人である自分に嘘をつき、からかっているなどナギにはまったく想像出来なかったのだ

もしマリアやクラウドが正しく、自分が間違っているのだとしたら……

そう考えたナギの頭は、とある仮説を立てた

しかし、ナギは瞬時にその仮説を破棄する

その仮説に基づけば確かにすべて説明がつくが、そんなことは起こり得ない現象であるはずなのだ

そうこうしているうちに、エレベーターが到着したのでナギは自分の目で真意を見極めるべく、エレベーターに乗り込み

こうなれば後戻りは出来ないと自分に言い聞かせ、ボタンを押した

自分の指が震えているのにも気付かずに……「ハヤテはいるか!？」

再び雑談が交わされていた生徒会室にナギが現れ、いきなり言った

「お嬢さま? どうかありませんか? 今日はお休みされていたはずでは……?」

ハヤテは予想しえない自分の主の登場に驚きを隠し切れていない

それに対してナギは真っ直ぐハヤテの所に向かい、真剣な表情で尋ねた

「単刀直入に聞くぞハヤテ。お前は生徒会長なのか?」

その問いにはハヤテだけでなく他の五人も目を丸くした

「え……お嬢さま?」

「どうなのだ!? はっきり言え!」

ナギがハヤテに迫ると

「そうよ。ってか今更? 春から私と一緒に副会長やって来たじゃない。」

とハヤテに代わりヒナギクが当然だと言わんばかりにすぐさま答えた
するとそれを聞いたナギはいきなり膝から崩れ落ちてしまった

「お嬢さま!？」

「ナギ!？」

「ナギちゃん!？」

突然の事にハヤテたちは思考が追いついていない

しかしナギがいきなり眼前で倒れてしまったのだ

当然ハヤテたちはナギを心配し近寄ったが

「いや、大丈夫だ。悪かったな仕事の邪魔をして……」

ナギはハヤテたちを制し、おぼつかない足取りで生徒会室から出て
いつてしまった

「お嬢さま……」

地上へと戻る途中のエレベーターの中、ナギは一人で呟いた

「こんなことがあるのか……漫画やゲームじゃないんだぞ……」
ナギの仮説は見事に当たったのだった

否、当たってしまったのだった

第七話（前書き）

もう少し早めに更新できたらいいなと思う今日この頃（＾ω＾；）

第七話

一体どれくらいの時間が経ったのだろうか

ナギはガーデンゲートを出て、歩きながらそう思った

実際は5分も経ってはいないのだが、ナギにはもう数時間経ったように感じられた

ナギの立てた仮説とは『自分は今、パラレルワールドに居る』

にわかには信じがたいが、何かの拍子でそんな非科学的なことが起こってしまったというものだ

どうにかして元の世界に戻らなければいけない

その方法を考えるためにナギは一度この世界の三千院家に帰ろうと車を待たせてある校門へと歩き出した

「おや？珍しいところで会うものだな。別世界の三千院ナギ君。」

不意に後ろから声をかけられナギが振り返るとそこにはフワフワと浮かぶ秋葉のロードブリティッシュがいた

「神父！！お前私がこの世界の住人じゃないって分かるのか！？」

「ああ私は既に生きてはいないからな。この体はいろいろと便利なんだよ。」

質問の答えにはなっていないような気がするが、ナギはそんなことにかまっている気にはならなかった

「つまりはお前は私がいた世界の神父と同一……霊なんだな！！」

ナギは神父に掴みかからんとばかりに近づきながら言った

「まあそういうことになるな。少し落ち着いて話でもするとしよう。そのベンチに座りたまえ。」

神父に促されナギはベンチに腰掛け、大きく一度深呼吸をしてから話し始めた

「私が元の世界に戻る方法は分かるか？」

「それは分からないな。」

神父はナギの質問があらかじめ分かっていたようで、間髪入れずに答えた

「そうか……」

ナギは残念そうに俯いた

「ならどうして私がパラレルワールドに来てしまったのかは分かるか？」

神父は今度の質問も予測していたかのように

うむ。と一度頷いてから話し始めた「そうだったな……今頃思い出したよ。」

神父はナギが本の波にのみこまれたことを話した

「それが理由なのかは分からないがな。」

「（恐らく何か別の理由があるはずだ。後で伊澄君にでも聞いてみるでしょう）」

神父はそう思ったが伊澄の力は秘密なので何も言わずに続ける

「とりあえずこの世界の君の執事のこととは話しておくべきだろう。」

ナギは執事という単語に反応し

「ハヤテのことか、頼む。」

と神父に向き直した

第八話（前書き）

一週間に一話UPを目指します？

毎日更新している方は本当に凄いですね？私には真似できません）
ω、・、（

第八話

神父の口から話されたハヤテは、ナギのいた世界とは境遇が違いすぎる。綾崎ハヤテ だった

綾崎ハヤテ

三千院家と並ぶほどの財力を持つといわれるグループ（欧州を中心としたいわば財閥）綾崎家の御曹司。

父はその綾崎グループの総帥。母は世界を股に掛け活躍する超有名デザイナー

将来的に綾崎グループを率いていくための勉強の一環として欧州の両親の元を離れ、三千院家の執事と白皇学院生徒会長をやっている性格は責任感に溢れ、基本的には真面目であるものの、女性に対しては割と軽薄だという欠点がある

などと神父の口からは様々な衝撃的な言葉が飛び出てきたが、ナギに最も驚きを与えたのは次の言葉だった

綾崎ハヤテには許嫁があり、その人物の名は 天王洲アテネ という

三千院、綾崎と並ぶ三大富豪の最後の一枠である天王洲家の現当主で白皇学院の若き理事長であるというものだった

ナギにそう告げた神父は当然ショックを受けているだろうと思った
よって生前は聖職者だった者として何か言葉をかけなければなら
ないと感じ、口を開こうとした

が、しかし

「そうか。」

ナギの反応は神父の予想とは違い、あっさりとしていた

「あまり驚かないんだな。」

「ああ。」

淡々とナギは続ける

「ここはパラレルワールドなんだ。元の世界と同じではつまらない
だろ。それに……」

「それに？」

「ハヤテがこの世界では親に捨てられていないのに私の執事である

ことが嬉しい。」

ナギは少し頬を赤らめ、照れくさそうに言った

「やっぱり運命なんだな」と小声で呟くナギをよそに神父は

この少女は本当にハヤテのことが好きなんだなと感じた

「では私はそろそろ行くとするよ。」

一通りの説明を終えた神父はそうナギに告げ、去ろうとしたが

ナギがそれを止めた

「どこか行くのか？」

「ああ。君が元の世界に戻る方法を調べてみるよ。」

するとナギは

「あと一つ頼みがある。」

と言った

「何だね？私に出来ることなら協力しよう。」

神父の言葉にナギは「ありがとう。」と礼を述べてから言った

「元の世界のハヤテたちに私は無事だということを伝えてくれ。」

その言葉を聞いた神父が「ああそうか。」と呟いたので

ナギは疑問符を浮かべながら尋ねた

「どうかしたのか？」

「いや、そういえば言っ てなかったなと思ってな。」

「何をだ？」

神父はナギのもっともな疑問に答えた

「元の世界にはこの世界の君が来ていてな。元の世界に戻る事を望んでいないぞ。」

「な！何故だ！？」

「さあな。よくは分からんが入れ替わったことをとても喜んでいたので。」

さらに神父はナギ告げた

「ちなみにすぐく馴染んでいて、あの少年もメイドさんもまったく気づいていないみたいだったな。」

するとナギはわなわなと拳を震わせながら

「あいつら!!」と怒声を上げた後

「おい!!神父!!」

怒りに任せて神父に言った

「気が変わった!私はこの世界で生きていくぞ!!」

ナギの言葉に神父は一応「いいのか?」と確認をとったが、「かまわん!!」と二つ返事で返された

「そうか。まあ頑張りたまえ。」

そう言って神父はその場を去っていった

「さて。伊澄君の所へ行くとするか。」

神父はいずれナギが「元の世界に戻る。」と言いついであるついでに見越して行動を開始した

第九話（前書き）

亀の歩みが如き更新ですが、お付き合ってくださいね（^ω^;）

第九話

「ハヤ太君。ナギちゃん追いかけていいの？」

ナギが去った生徒会室で泉がハヤテに言った

「大丈夫ですよ、泉さん。なんせ僕のお嬢さまですからね。」

「いやいや意味が分からんぞハヤ太君。」

ハヤテの珍回答にすかさず美希がツツコミをいれた

「まあ来る途中に車で寝ちゃって、本当の要件は忘れて、寝ぼけて変な質問だけして帰ったってとこじゃない？」

ヒナギクがハヤテに代わり答えるとハヤテも恐らくそうだ。と頷いて

「さて、やることも無くなってきましたし、そろそろ帰りましょうか。」

と言い出した

ヒナギクや泉たちはそれに同意し、帰り支度を始めたが、愛歌は

「そういえば会長。先程理事長がすぐ理事長室に来るようにとおっしゃっていましたよ。」

とうっすら、笑みを浮かべて言った

その愛歌の一言で生徒会室は一気に凍りついた

ハヤテの顔は青くなり、ヒナギクはガタガタと震え、泉たち三人は机の下へ潜り、耳を塞いだ

そんな張り詰めた空気の中、ニコニコしている愛歌にハヤテは恐る恐る聞いてみた

「あの……愛歌さん？それは一体いつ頃聞いたんですか……？」

「そうですね、ハヤテ君がヒナといちゃついて周囲の存在を完全に抹消していたときにメールが来てました。」

「愛歌さん……嘘……ですよね……？」

ハヤテの目に涙が溜まり始めた

「ハヤテ君には私が嘘をつく人に見えますか？」

ハヤテの問いに天使の皮を被った悪魔が如く愛歌は答えた

「うわあああああああ！！」

それを聞いたハヤテは文字通り疾風の如く、生徒会室を飛び出していった

それを見た愛歌は小さく

「ああ…快感……」

と呟いた

このときの他の四人の心境は

『たとえ世界を敵にする事になったとしてもこの人に逆らってはいけない』

この人生の教訓だった「し、しし！失礼します！！」

荒々しく理事長室の扉を開いたのはバッドエンドまっしぐらの生徒会長であった

「随分と良いご身分ですねハヤテ。私をこんなにも待たせるなんて……」

白皇学院理事長室の主は手に持っていた紅茶を置き、ゆっくりと立ち上がった

このときのハヤテは下を向いていたのだが、確かに黒きオーラを纏った何かが見えたという

「ち、違うんです！理事長！！これには訳が！」

ハヤテの必死の言い訳をも耳に入れず、アテネは数々の装飾が施された模造刀を手にしてゆらりとハヤテに近づいてくる

そして……

「問答無用!!」

と言って大きく振りかぶった

ハヤテの右手は別に幻想を壊したりはしないのだが、このときばかりは某禁書目録のツンツン頭の口癖を叫んだ

「不幸だあああああ!!」

第九話（後書き）

恋愛ものが書いてみたいなと思ったりもしますが……

書けそうにない現実には

（´・ω・｀） ショボンヌ

第十話（前書き）

「読めば一度は発狂する」

そんな宣伝文句にひかれてドグラ・マグラという小説を読んでいます。

この話とは全く関係ないですけど（笑）

第十話

白皇学院の理事長室には現在、一人の生徒しかも生徒会長がうつ伏せで倒れている

そしてそのすぐそばには白皇学院理事長 天王洲アテネ が息を切らしながら立っている

今理事長室に訪問者があれば警察に通報してしまうかもしれない。
そんな状況だ

そんななか被害者もといハヤテは突っ伏したままで口を開いた

「うつうつ……理事長……お許しを……」

「まだ分かっているようにねハヤテ。」

ハヤテがか細い声で許しを求めても、アテネは何か気が入らない
そんな様子だった

「私はあなたが遅れてきたことに怒っているわけでは……ないこと
もないですけど……もっと他に理由はありますわ。」

それを聞いたハヤテはゆっくりと立ち上がり、まったく心当たりがない
といった表情をした

するとアテネは少し頬を赤らめて小さな声で言った

「い、今は二人きりなんですから……その……あの……」

今のアテネは普段の凜とした様子からは想像も出来ないくらいモジモジとしている

それを見たハヤテは何か企んでいるような笑みをアテネに気づかれないように浮かべた

実のところハヤテにはアテネの言わんとしていることが分かっているのだが、意志が伝わっていないように振る舞った

アテネが問い、ハヤテがとぼける。そんなやり取りがしばらく続き、ついにアテネは痺れを切らした

「ですから！今は二人きりなんですから理事長ではなく！その……と……」

アテネは俯きながら先程よりも小さな声で言った

それを聞いたハヤテは思わず笑みをこぼし、

「え？今何て言ったの？……アーたん？」

アテネに問いかけた

ハヤテの言葉にアテネはハッとなり、ハヤテに向き直った

案の定そこにはニヤニヤと満足そうな笑顔があった

「……ハヤテあなた。」

アテネはすぐに気がついた。自分は謀られたのだと

「ああーアーたんのモジモジした姿可愛かったな」

そうこの男の言動はすべて計算であつたのだ

アテネはハヤテに踊らされたことに対する怒りと先程の自分の言動の恥ずかしさから震えが止まらなかった

「ハーヤーテエー!!」

今にも怒り狂い、ハヤテに襲いかからんとした時だった

「んむっ!？」

いきなりアテネは抱き寄せられ、唇を温かい何かに塞がれた

突然の出来事にアテネは怒ることすら忘れ、驚愕し、動揺し、先程よりもはるかに顔を紅潮させた

お気づきの通り、現在アテネはハヤテに抱きかかえられるような状態で口づけをされている

それはそれは甘くとろけるような甘美な口づけを

始めこそ動揺していたアテネだったが、次第に夢でも見ているかのようポーツとしてきてしまった

まるで魔法にでもかかったかのように

白皇学院生徒会長 綾崎ハヤテ 能力その1『夢魅せ（チャーム）』

ハヤテにより唇を奪われた女性はアテネのようにしばらくは夢心地となる。（もちろん例外はある。）

ちなみにハヤテは既に白皇学院の大多数の女生徒に手を出している（キスをしている）ため、学院内の大多数の男子生徒は彼の敵であるしかし生徒会長をつとめているのは選挙を勝ち上がったからであり、

人徳があるのも事実である

「愛してるよアテネ。」

唇を離し、ハヤテはいつもの愛称ではなくあえて名前で言った

「あつ……」

だがアテネはまだ魔法にかかっているままで、ハヤテに返事を返すことが出来ない

そんなアテネをよそにハヤテは少し乱れてしまった自身の身だしなみを整えて

「それでは理事長。僕はこれで……」

理事長室を後にした

アテネが伝えんとしていた事を聞くこともせずに

空が夕焼け空から星空に変わり始めた頃、アテネはようやく正気を取り戻した

そして辺りを見回しハヤテがいないことを確認すると、理事長の椅子に腰掛けすっかり冷めた紅茶を一口飲んでから

「ハヤテのバカーー!!」

心の底から叫んだ

第十一話（前書き）

毎週土曜日（というよりも日曜日と言った方が正確？）に更新しようと思います

頑張ります（・ω・）

第十一話

屋敷へと戻ったナギは玄関先で硬直していた

それは驚きから来るもので、その驚きの原因は

「どうかなさいましたか？お嬢様？」

きやるん

ナギの眼前で得意の作り笑顔をうかべ春風千桜ことハルがナギに問いかけているからである

「あ……ああ。た、ただいま……」

もちろんナギは自分の屋敷に咲夜のメイドがいることに驚きを隠せない

しかしここはパラレルワールド

何が自分の世界と違っていようが不思議ではない

たどたどしい返事のナギにハルは疑問を抱いたが、ナギが部屋に戻っていったので自分の仕事に戻った

「おかえり。えらい遅かったやないか。」

「なるほどそういう事か、焦った自分が恥ずかしい。」自分の部屋に戻ったナギは率直にそう思った

「なんや？どないしたんや？」

愛沢咲夜 はナギのベッドに寝転んだままで戻ってきたナギに問いかけた

「咲夜が家に来ている。」だからハルが居たのだ

そう思つて一人で頷くナギを見て咲夜は

「……自分変なもんでも食つたんか？」

不気味に思いながらそう呟いた

「いや。何でもない。ところで今日は何の用だ？」

「……は？いや別に用なんか無いで？」

「何か用があるから来たんじゃないのか？」

「いや。住んでる家に戻ってきただけやし……ほんま変なナギやな。」

そんなやりとりをしていると咲夜がナギに少しの違和感を感じた

その時

ーいいか。この世界の住人に自分が別世界の住人だとは気づかれるなよ。気づかれればどうなるか分からないー

先程ナギは神父からそう忠告されていた事を思い出していた

あまりに迂闊だった自分に後悔の波が押し寄せてくる

『ここはパラレルワールド』

何が自分のいた世界と違っていようが不思議ではない

そう分かっていたはずなのに

「ぐうつ！？」

ナギは突如激しい頭痛に襲われた

頭が割れるような痛み

例えるならば『頭蓋を内側から鈍器で殴られている』

そんな激痛にナギは太刀打ち出来ず、頭を抱えてその場にうずくま
った

「（痛い、痛いよ……助けて……助けてハヤテ……）」

目に涙を浮かべ、自分の愛しい執事の事を思いながら必死に激しい
頭痛に耐えていたナギだったが

ふと痛みが消え失せ、自分の意識が薄れていくのを感じた

「何や！？どないしたんやナギ！？」

異変に気づいた咲夜がベッドから跳ね起き、ナギに近づこうとした
とき

「あっ……」

ナギは小さく声を漏らして、うずくまった姿勢からぐらりと揺らし、力無くパタリと倒れてしまった

咲夜は急いでナギに近寄り、揺すってみたり、軽く頬を叩いてみるがナギは目覚めなかった

「マリアさん・ハルさん!! 来て!! ナギが!! ナギが!!」

咲夜の絶叫とも取れる叫び声が屋敷中に木霊した

第十二話（前書き）

生徒会の七光 買いました？

……すみません。（――；）
内容とまったく関係ないです？

第十二話

「いい加減起きろー!!」

突然の怒声にナギは飛び起きた

屋敷ではない何処か。見渡す限り何も無く、辺りは薄暗く昼とも夜とも違う、そんな印象を与える景色

それが何処なのかはナギには皆目見当もつかない

しかしナギに考えている時間はない

「おい！聞いているのか!!」

ナギに先程から怒鳴っている人物

「わ……私……？」

ナギの目の前には自分自身、つまりはナギが居たのだ

分かりづらいので別世界のナギは別ナギと表記します。

この作品の主人公のナギはナギのままですのでお願いします

「なあ？お前神父から聞かなかったのか？」

挨拶もなしに別ナギは驚き戸惑うナギに冷たく問いかけた

「何がだ？」

平静を装いつつナギは負けじと無愛想に返す

すると別ナギは不適に笑いながら

「別世界に来ている事がバレればお前は……」

別ナギは手で銃を真似て、バァンと声に出して撃つふりをした

「……死ぬというのか？」

ナギが驚きを必死に隠しながら別ナギに問うと

「いや。それは正しいとは言えないな。正しくは……消え去るだ。」

淡々と別ナギが答え、更に続けた

「『三千院ナギ』という者の存在が無くなる。他者の記憶からも完全に消え去り、生きていた痕跡も何一つとして残さず消える。ただしお前は、だかな。」

言い終えた別ナギは堪えていた笑いを解放した

一方のナギは『お前は』という単語に引っかかっていた

つまりは別ナギはバレたとしても消えないということ

「……どういう意味だ？」

大方の予想をつけながらもナギは別ナギに問いかけた

するとナギの予想通りに別ナギは答えた

「私が犯人だからさ。ま、共犯者もいるがな」

「何故こんな事を？」

もつともな疑問に別ナギはすんなり答えた

「私はお前が許せない。」

別ナギはつきりそう言った

「なんだと!？」

怒るナギをよそに別ナギは続ける

「お前は私に出来ないことが出来る。……だがお前はそれをしよう
ともしない……」

「一体何が言いたいんだ!!」

ナギの怒りは膨れ上がり続ける

しかし別ナギはナギに冷ややかな視線を送りながら侮蔑するように
言った

「綾崎ハヤテ」

思いもよらない名前が登場し、ナギは驚く

「お前にはハヤテの恋人になるチャンスがある。だが私にはそれは
無い。」

戸惑うナギをよそに別ナギは淡々と、しかしどこか重く告げていく

「どういうことだ!!ちゃんとわかるよう……」

「私はハヤテが好きなんだよ!!」

ナギが別ナギの一方的な言葉を止めようと声を荒げたが、それ以上
の大声で別ナギが叫んだところで二人に一時の静寂が訪れた

「愛してるんだよ……」

別ナギの言葉にナギは怒りを忘れてしまった

「お前の世界ではハヤテの恋人になれるんだ！」

「……だがこの世界のハヤテは恋人どころか、もう既に結婚相手も、将来も決まっている。」

「……………」

「お前に分かるか？『決して叶わぬ恋』がどれほど辛いのかさ」

「お前には分からないだろうな。チャンスを活かすこともせず、我が儘ばかりでハヤテを困らせるだけのお前には。違うか？」

ナギは別ナギに何も反論しなかった。

反論出来なかった

「……だから私はお前と入れ替わりそのチャンスを活かす。ハヤテと恋人になってやるんだ！！」

「うぐっ！？」

別ナギがそう言い終わった瞬間、ナギは再び激しい頭痛に襲われた

「そろそろ時間のようだな。」

それを見た別ナギは背中を向け、去ろうとした

が、思い出したようにナギに向き直り

「お前には悪いが、私は自分の幸せが一番なんだよ……」

別ナギの言葉を臍気に聞きながらナギは再び意識を闇に落としていった

第十三話（前書き）

今回の話は悪役的なキャラが登場します（・ω・）キリッ

第十三話

「今……何と言ったんだ伊澄君……？」

鷺ノ宮家の屋敷の客間で幽霊神父 リイン・レジオスター は 鷺ノ宮伊澄 の言った言葉に思わず自分の耳を疑った

「神父さん。聞こえなかったんですか？もう一度言いますよ……」

「ナギを別世界に送ったのは私です。」

自らたてた茶を優雅に飲みながら伊澄は言った

神父は伊澄に助けを求めにここにやって来た

しかし助けを求めた相手が自分が犯人だと言ったのだ。困惑しない
筈がない

「つまりは……君が今回の件の犯人……だということだな？」

神父がどうにか気持ちを落ち着けてそう尋ねると、伊澄は即座に肯定するように小さな笑みを浮かべた

それを見た神父は「何故だ！」と一瞬声を荒げたが、冷静さを保とうと一度咳払いをした

そんな神父を見て伊澄は「落ち着いて下さい。」と静かに言って、また新たに茶をたて始めた

「どうぞ。粗茶ですが……」

「……私は飲めないのだが？」

差し出された茶の器を見た神父は少し馬鹿にされているように感じ、少し苛立った声で言った

しかし伊澄は天然ぶりを発揮していただけなので、「そうでした……すみません……」と申し訳なさそうに言った

そんな伊澄を見た神父は少し罪悪感を感じた

「話を戻すが……何故ナギ君を別世界に送るなんて事をしたんだ？」

神父は先程のように声を荒げず、静かに伊澄に問いかけた

すると伊澄は

「何故？」と首を傾げた

「私がナギのためにならない事をすると思いますか？」

神父は黙ったが、伊澄はかまわずに続ける

「これはナギの為。そして……私の為。」

その言葉を聞き、神父は伊澄の意図がまったく分からなくなった

「君の説明は全く要領を得ない。私にも分かるように話してもらいたいものだ。」

伊澄はふうと一息つくと、話し始めた

「ナギがハヤテさまのことが好きなのはご存知ですね？」

神父は「ああ。」と頷く

「私もなんですよ。私もハヤテさまのことが好きです。これは愛と
いつでも過言ではありません。」

「でもナギは私の親友……いえ、『真友』です。悲しませるようなことは絶対にしたくない。」

「彼のことは諦めていたというわけだな。」

伊澄は頷き、続けた

「ところがある日、私にあることが起こりました。」

「それは私に別世界に干渉する力を与えてくれました。」

「そこまで聞くと神父はすべてを察したように「なるほどな。」と呟いた

「お分かりのようですね。私は今こちらに来ているナギに目を付け、入れ替えた。」

「あちらではナギがハヤテさまと結ばれる。そして……」

「こちらでは私がハヤテさまと結ばれる。どんな手を使っても…
…奪い取る。」

そう言った伊澄の表情はとても年相応の少女のものではなかった

『妖艶』 恐怖すら覚えるくらいの艶めかしい笑みに

神父は思わずゾクリとした

「さて……」

伊澄が不意に立ち上がり神父に告げた

「少しお喋りが過ぎたかも知れませんが。神父さんどうぞ
てください。」

そして伊澄は一枚の札を神父に投じた

突然に投じられた札に神父は反応できず、札は神父の額を捉えた

「ぐあぁっ!？」

「安心して下さい。滅したりはしません。ただ……忘れて貰います。色々なことを……ね？」

伊澄は怪しい笑みを浮かべると神父に背を向けた

それを見た神父は襲い来る激痛に意識を失いそうになるが、なんとか声を発した

「い、伊澄……く……ん……」

「何ですか？」

伊澄は部屋から去ろうとしていたが、足を止め、振り向かずには神父の言葉に耳を傾けた

「君は……それでいいの……か？」

苦痛に顔を歪ませながらも神父は伊澄に問いかける

「……失礼します。」

伊澄は神父の質問に答えずに部屋を去った

振り向かずに部屋を去ったことで伊澄は神父の決意に満ちた表情を
見ることはなかった

第十三話（後書き）

今年の更新は今回で終了です。

お付き合い下さってありがとうございました

来年もどうぞよろしくお願いします

？ m (— —) m ？

第十四話（前書き）

2010年最初の更新です。

本年もよろしくお願いします。〇――＊〇

皆様はどんな正月を過ごされましたか？

私はぐーたらしてました（笑）

第十四話

ここはナギの寝室

ベッドにはナギが横たわっている

咲夜の叫び声を聞きつけたマリア達は戻ってきたハヤテと共にすぐさま医者¹に連絡をとり、状態を診させた

しかし三千院家お抱えの優秀な医者をもつてしても倒れた原因は不明だった

だが命に別状はないことと、運動不足の方が深刻だということを告げて医者²は去っていった

それから数時間後に目を覚ましたナギの視界に最初に入ったのは自分の執事の姿だった

「ハヤテ……」

ゆっくり起きあがってみるとハヤテの他にもマリアやクラウド、タマとシラヌイ、咲夜とハルもそこにいた

元の世界と家具の配置も何一つとして変わらない自分の部屋

自分は戻って来られたのだろうか

それともまだパラレルワールドに居るままなのか

恐らくは後者

そう考え、先程の二の舞にはなるまいとナギは慎重になる

そんなナギはとりあえず時間を確認しようと時計を探した

見てみると既に0時を過ぎており日付が変わっている

いくら眠っていたとはいえ朝食をとったきりで何も口にしていなかったナギは

「腹が減った。マリア何か作ってくれ」

起きたての覚醒しきっていない頭で何も考えずに言った

「「ええっ!?!」」

ナギのその言葉を聞いた瞬間、その場に居合わせた当のマリアを含めたナギ以外の全員が一斉に声に出して驚いた

この反応はナギにとっては凄く新鮮な反応だった

「し、正気ですか……？」

額に軽く汗をかいたマリアがそう問いかけても、ナギは首を縦に振って肯定するばかり

「わ、分かりました。」

ついにマリアは決意を固め、台所に向かっていった

マリアの居なくなったナギの寝室で咲夜が寝るように口を開いた

「あんなナギ。いくら刺激的な物が欲しくてもマリアさんの料理だけはアカン。ダメゼツタイや。」

咲夜の言葉に周囲のハヤテたちも頷いている

それを見てナギは少し焦り始めた

「これは地雷を踏んでしまったかもしれない。」と

『後悔先に立たず』

ナギの胸にこの言葉はもちろんしかと刻まれることとなる「キヤー
！！塩が！！」

「跳ねたー！！！」

「キヤー！！火が火が！！」

など多数のマリアの叫び声が台所から聞こえてきた

それを聞きながらナギは悟った

「こっちのマリアは料理が出来ない」と

しかしその数分後

ナギの予想とは裏腹に目にも美しい料理の数々が運ばれてきた

彩りも香りも完璧で、まさに非の打ち所がない

ように見える料理をナギはワクワクしながら口に運んだ

しかしナギへの残念なお知らせ

「うっっ……」

口に含んだ瞬間から口内が焼けるような錯覚を覚え

咀嚼すると視界は霞んでグルグルと回り、本能が飲み込むことに對して警鐘を鳴らす

本能の救いを無視して無理矢理飲み込むと、次は胃が悲鳴どころか断末魔をあげるようにキリキリと痛む

さらに加えて強い吐き気と言いつつのない不快感、先程味わったものよりも激しい頭痛などを与える料理（兵器）がナギを襲った

形容詞では到底形容できないこの世の物とは思えない代物

これこそが真の暗黒物質^{ダークマター}

恐らくこれを作り出し食させていれば、学園都市第二位はベクトル云々言わずに第一位を倒せていたことだろう

そう思うハヤテの顔には先程よりも心配の色が多くある

もちろん心配されるナギはそんな物質に耐えきれほど頑丈ではないので

「せやから言つたのに……」

咲夜が呆れたように頭を掻き、言つたところで

ナギはまた気を失つた

三千院家メイド　マリア能力その1『ボイズンクッキング劇毒料理』

見た目からは想像すら許さない味で食した者を即座に気絶させる料理が作れる

ちなみにナギの朝食（昼食）はあらかじめハヤテが作っておいたものをマリアが温めただけである

第十五話

小鳥のさえずりを目覚ましの代わりにしてナギはゆっくりと目を覚ました

昨日の記憶が少し飛んでいて、マリアに料理を頼んだところから先を覚えていなかったのだが

思い出そうとすると自然と体が震えたのでナギは思い出すことをやめ、ベッドから出た

するとまるで計っていたかのようにナギがベッドから出たのと同時にコンコンというノックの音が部屋に響き

「お嬢様、朝ですよ。今日は私が朝食を作りましたよ。」

部屋の扉を開けてハルが入って来た

そして手には白皇の制服を持っているのが寝起きのナギの目にも見てとれた

「おはようございますお嬢様。」

きやるん

お約束の作り笑顔を浮かべるメイドの手元を見て嘆息しつつ、ナギも挨拶を返す

それに対しハルはニコリとして

「もちろん今日は学校ですよ。」

そう告げた

綾崎ハヤテは執事である

よって基本的には登校前も屋敷で仕事をするのだが

この日はまだ早朝であるにもかかわらずその足を生徒会室に向けていた

ハヤテは几帳面といえる性格をしているため、この日の放課後のある会議に十全で臨むための準備をするべく、執事の仕事を休み、屋敷を出たのだった

そしてまだ誰も登校はおろか、まだ夢の中だと思われる時間に生徒会室に到着したのだが

生徒会室には先客がいた

「おはようハヤ太君。」

予想外の先客にハヤテは戸惑いながらもニツコリと微笑み

「おはようございます泉さん。随分と早いですね。どうかされたんですか？」

泉はハヤテの質問の答えに迷うかのように言葉をつまらせながら答え始めた

「えつと……今日はたまたま早く目が覚めちゃって……」

「することも特にないし……眠くないし……仕方なくこんな時間に学校に来たってわけで……」

そう答える泉の目が泳いでいるのを見たハヤテのスイッチが即座に切り替わって、悪戯に微笑んだ

「嘘だね。」

「えっ！？あつ……その……」

図星であった泉は少し紅潮しながらもなんとか取り繕おうと必死だった

そして

「ほ！本当だよ！！……べ、別にハヤ太君に早く会いたかったとか
そんなのじゃないもん！」

しどろもどろになりながらも何故かツンデレ風に反論した

「泉……」

するとハヤテは突然に泉を抱き寄せた

「ふえっ！？ハ！ハヤ太君！？」

泉は顔から火が出るかのように真っ赤に紅潮した

しかしハヤテは泉を離さない

「照れ隠しに嘘をつく君も素敵だけど……素直な君はもっと素敵な
はずだよ。」

「僕の前だけでいい。素直な君でいてくれ泉……」

歯が浮くどころか、歯が浮かび上がってどこかに飛んでいってしま
いそうな台詞をハヤテはさらりと言い

さらに泉の耳元で

「好きだよ……」と優しく囁き

自らの唇を泉の唇にそつと寄せた

「またやっちゃった……」

すっかり夢心地の泉をソファーに寝かせたハヤテは最早反射とも言える自分の行動に後悔していた

「せつかくの援軍が……」

『自業自得』この言葉がハヤテにずっしりとのしかかる

そんな早朝的一幕

第十六話（前書き）

ユニークアクセスが目標としていた2500を突破いたしました？
？＼（。°。；）ノ

読者の皆様本当にありがとうございます。（――＊）。

まだまだ未熟者ですが精一杯頑張ります。

2010年1月1

7日

第十六話

「この資料は……え〜と……あれ？」

ハヤテは一人資料作成に悪戦苦闘していた

仕事は 出来る・出来ない でいえば出来る部類に属するのだが、
会議の資料作成においては愛歌に一任していたので、手間取ってしまっていた

「こんなとき愛歌さんがいてくれたらなあ……」

ハヤテは冗談混じりで自嘲気味に呟き、再び作業を開始した

それから数分が経過した

ハヤテの手は再び行き詰まり、キーボードから離れた

それを待っていた

そう言わんばかりに不意にハヤテの肩にボンと何かが触れた

それが人の手であるということはすぐにハヤテは理解したが

肩に触れたこの瞬間までに人の気配を感じることは微塵もなかった

ハヤテに気配を感じさせないで近寄ることの出来る人物など白皇には数えるほどしかない

まして今は早朝であり、大抵の生徒は登校すらしていない

「誰だ……？」

よってハヤテは金銭目的の敵襲も視野に入れ、警戒心を強めながら少しドスを聞かせた声で問いかけた

「綾崎ハヤテ……」

そこに返ってきたのは聞き知らぬ野太い男の声だった

「死んでもらうぞ……！」

ハヤテの対応は早かった

あらゆる攻撃に対して有効な回避

それをハヤテは瞬時に選択し、自身の身を空中に投げた

しかし、空中を旋回した後、無事に着地したハヤテに浴びせられたのは攻撃ではなく

一人の女性から発せられた拍手

しかもその拍手を送る女性はハヤテのよく知る女生徒だった

「呼びましたか？ハヤテ君？」

霞愛歌 は声の主であるICレコーダーを持って満足そうにニコリとしていた

「あ、愛歌さん……驚かさないで下さいよ……」

ハヤテはからかわれたのだと気づき、がっくりとうなだれた

「今日の会議の資料ですね。分かりました。」

「今日はあの変態との決戦ですから、準備は怠らないようにしないとけませんからね。」

ハヤテは立ち直るのに少々の時間を要したが、無事に復活し、愛歌に協力を依頼することにした

それを愛歌は二つ返事で承諾したが

その表情は何かを企んでいるような感じをハヤテに与えた

「ただし、条件が一つあります。」

「条件……ですか。」

ハヤテの予想通りに愛歌は見返りを求めてきた

もしかすると女装させられたりするのだろうか

そんなハヤテの考えとは違った条件を愛歌は提示してきた

「少しの間だけ目を閉じていて下さい。」

それを聞いたハヤテはあまりにも易い条件に隠されているであろう

愛歌の意図がまったく読めず、少し不安を抱きつつ目をゆっくり閉じた

その直後、ハヤテの唇に柔らかい何かが触れ、少ししてから離れた

「私も嫉妬くらいするんですよ？」

「見られちゃいましたか……」

ハヤテと愛歌はソファーに目をやった

すでに泉は寝入ってしまったていて、スヤスヤと規則正しい寝息をたてている

「でも愛歌さん良いんですか？」

ハヤテは愛歌の方を向き、疑問を投げかけた

「何がですか？」

「何って……愛歌さん許嫁がいるじゃないで……」

と言いかけたところでハヤテの唇は愛歌の人差し指によって軽く押さえられた

「それはハヤテ君も同じでしょ？」

愛歌にそう言われハヤテは「まあそうなんですが……」と苦笑いを浮かべる

「それに……」

「それに？」

「禁断の恋はお嫌いかしら？」

まさに不意打ちだった

浮かべられた愛歌の悪戯な笑みは百戦錬磨のハヤテを魅了し

『本当に恋に落ちてしまう』かとさえ思わせた

しかしすぐにハヤテは一瞬とはいえ、そんな考えを持ってしまったことをフツと鼻で笑い

愛歌を抱き寄せて軽く唇を重ねた

「これが僕の答えだよ愛歌。」

ハヤテは切り札ともいえる決め顔でそう言った

しかし愛歌は

「さあ仕事しますよ」と言っ
てハヤテに背を向けてパソコンへと
向かっていった

「……あれ？スルー？」

ハヤテの決め顔は見事に不発だった

霞愛歌はハヤテのキスに抗体がある人物の一人である

第十七話（前書き）

「ムダヅモ無き改革」という漫画をご存知ですか？

今日アニメイトで1巻と2巻を買って読んだんですが……

ライジングサン
十三面国士無双はまだ麻雀してます。でも……

ビギニングオブザコスモス
天地創世はもう麻雀じゃないっすよ（笑）

とにかく小泉ジュンイチローがスゴいのなんの（ry

またもや本編と一切関係のない私、不知火の戯れ言でした。（

―＊）○

第十七話

時刻は午前8時を少し過ぎた頃

一人で朝食をとっていたナギの目の前にナギにとっては驚きの人物が現れた

「まだ食べてるのか？早くしろよ。遅刻しちゃうだろ？」

「！？」

いきなり現れた春風千桜を見てナギは口にしていたものを吹き出しそうになるも、なんとか耐えて飲み込んだ

そしてようやく言いたかったことを口にする

「な、何でお前が……」

しかしここまで言ったところで咲夜との一件を思い出して踏みとどまる

「（私はコイツと一緒に学校に行っていたのかもしれない）」

そう思ったナギは一つ探りを入れてみることにした

「も、もうそんな時間か？……いつもより何分くらい遅れてるんだ？」

多少たどたどしい物言いのナギだったが、千桜は気に止めなかった

「まあ大体十分くらいだ。」

ナギの読みは的中し、千桜と共に学校に行っていることが確定したナギの中では「千桜が毎朝三千院家に通ってきている。」と結論づけたが

実際はハルが着替えただけであることにナギは気付かない

「もう少しだけ待ってくれ……」

ナギは残っている分を口に放り込むようにして食事を終えた

「行ってきます。」

「行ってくる……」

玄関で見送るマリアに 千桜↓ナギ の順で言葉をかけて車に乗り込み、運転手に車を発車させた

ちなみに咲夜だけは学校が違うので既に出発している

走り出して約5分。車内では無言が続き、すがすがしい朝であるはずなのに空気が重い

運転手が「給料は良いけど嫌な職場だな。」などと思っていると

窓の外を眺めていた千桜が不意に口を開いた

「お前、ちゃんと予習したのか？今日の数学の授業で多分当たるぞ。」

しかし視線は時速30km程で流れていく街並みから離さない

そしてそれはナギも同じだった

「私にそんなものは必要ない。」

反対側で千桜と同じようにボーッと眺めながらそっけなく返した

「そうか……」

ナギと千桜の会話はまったく弾まず、再びお互いに黙ってしまったので、運転手は二人に聞こえないような小さな溜め息をついた

そんな運転手の心労を知る由もないナギは少しだけ安堵していた

自分の隣に居るこの春風千桜は一緒に学校に行っていることを除き、

自分に接する態度などから元の世界の千桜と変わりがないと判断したからだ

しかし、ここでもあの台詞が登場する

『ここはパラレルワールド』

どう違っていいのかはナギはまだ知ることすら出来ないのだ

補足

千桜にとって三千院家メイドはあくまでバイトであり、勤務時間外（学校やその登校時など）はナギの同級生に戻る

したがって口調もメイドの時とは異なるものとなっている

第十八話（前書き）

今回の話はあまり深く考えないでください？

第十八話

白皇学院の敷地内で最も目を引く建物ガーデンゲート

その最上階に位置するのが綾崎ハヤテを生徒会長に据えた生徒会

そしてこの世界にはもう一つの白皇学院生徒会が存在する

白皇学院は生徒の自主性を尊重する方針をとるため学校の運営は生徒会が担うことになっている

だが生徒会に全てを任せるというのもどうだろうかというのが理事会での創立時の意見だった

そこで権力の分散を目的として発足させたのが『第二生徒会』である

しかしそんな理事会の思慮は全く持って無駄となる

白皇学院生徒会は完璧に仕事をこなし、名門に相応しい実績を残し、それに伴い第二生徒会の存在は薄れていった

白皇学院旧校舎の片隅

そこにひっそりと佇んでいるのが現在の白皇学院第二生徒会室

白皇学院第二生徒会長 瀬川虎鉄 もハヤテと同じく放課後に控えた協議会に備え、予め資料作成を依頼していた人物と会っていた

「虎鉄君。これが頼まれていた資料だ。」

女生徒は資料を手渡し、代わりに虎鉄から謝礼の高級チョコレートを受け取った

このチョコレートは数量限定で販売されていて、箱での販売は行われていない

購入するには予約が必要で最低2年はかかるほど入手困難なのだ

そんな入手困難な代物だが虎鉄は鉄道関係の友人がコネを持っているために容易に入手することができる

極秘資料と入手困難な代物の取引

結果は取引成立で今に至る

女生徒は手渡されたチョコレートをポケットにしまった

虎鉄が一通り確認を終えると、すぐそばでそれを見ていた女生徒は更にもう一つ封筒を取り出した

「これはサービスだ。」

投げられた封筒は中身の重量のおかげで空中を舞わず、真っすぐに虎鉄の手に納まった

「何だこれは？」

依頼にはなかった封筒に虎鉄は少しだけ戸惑う

「対生徒会用のジョーカー……といったところさ。」

女生徒は自身の情報網と人脈を使い、ようやく手に入れた生徒会の綻びを満足げに説明した

「そつか副会長がな……」

虎鉄は唯一ともいえる弱みを手に入れ不適に笑んだ

しかしそれと同時に浮かんだ疑問を女生徒に投げかけた

「生徒会に問題が見つかればお前にも都合が悪いんじゃないのか？」

「綾崎が失脚すれば……」と虎鉄は続けようとしたが女生徒は最後まで聞くことはせず

「構わんさ。」と言だけで返し虎鉄に背を向けて歩き出した

「彼に生徒会長を辞任してもらうのが私の計画なんだよ虎鉄君。」

女生徒は聞こえるはずはないとは知りながらも虎鉄に向けてそう言い、ポケットをまさぐった

手に取ったのは先程のチョコレート、荒っぽく包み紙を外して口にポイと入れた

「……う、美味しい……」

思わず感嘆の声が漏れた

少し舐めただけでとろけるような甘さが舌の上で踊るように広がる

噛んでみるとブランデーの香りがふわりと口の中に広がり、心地よ
さすら感じる適度な苦味が加わって感動すら与えてくれる

予想以上の味わいを堪能した女生徒は手に残った包み紙をゴミ箱の
上で手放した

「君もせいぜい私の駒の一つとして頑張ってくれよ……」

ゴミ箱に落ちた包み紙を誰かと重なるように女生徒は言って旧校舎
を後にした

甘美な味わいに浸っていた表情は既にそこになかった

「駒か……駒はお前の方だよ。」

一人生徒会室に残った虎鉄は椅子に腰掛けながらあざ笑うように呟いた

何故虎鉄に女生徒の言葉が聞こえているのかという理由は至ってシンプル

虎鉄が先程手渡した謝礼にちょっとした細工を施していただけである

『謝礼に自社で極秘に開発した盗聴器を仕込んでおいた』

というよりも謝礼として渡したのが

『盗聴器に包んだチョコレート』だったのだ

その盗聴器は見た目も手触りも少し固めの紙と相違ないもので、素人目からでは絶対に気づかない

あとは裏筋のパスポート偽造師に加工させれば包み紙の完成

相手の性格上、自分を利用せんとしていることは容易に想像できた

しかし利用されるなどプライドが高い虎鉄は許せなかった

そこで盗聴器のテストも兼ね、相手の弱みでも握ってやろうと考えたのだ

唯一の誤算は予想よりも遥かに早くチョコレートを食べられ、包み紙が捨てられたことだが

それでも盗聴器のテストの結果自体は良好であり虎鉄は十分満足だった

「さて……」

不意に声を漏らして虎鉄は立ち上がり、窓から高くそびえる時計塔の頂上を見つめた

それと同時に満足げだった虎鉄の表情が不敵で不気味なものに変わった

「精々俺の手のひらの上で可愛く踊ってろよ……」

虎鉄の表情は悪役を陰から操る真の悪役のものだった

第十九話（前書き）

く 本日の作者く

朝9時に起きて劇場行けば余裕余裕く三（
。 ㇿ ）

『満席』。一一一

悔っていた……長門を……

第十九話

「おはよー千桜さん、三千院さん。」

「おはよう春風、三千院。」

教室に向かう廊下の途中。すれ違う生徒達が口々に挨拶をしてくる。ここでも元の世界との差に戸惑うナギに対し、千桜はそれを愛想良く軽く笑いながら返していく。

その様子はクールとは言いがたいが、別の魅力に溢れていた。

ナギも驚きを制しつつ、会釈を始めた。

学院ではより一層元の世界と違いがあるようだ。

「何があっても受け入れよう。」

そう固く決心するナギであった。

教室に入ると朝だというのにザワザワと騒がしく、窓際に人ばかりが出来ていた。

「あ、お嬢さまおはようございます。」

人だかりの中心にいたハヤテはナギが席に着くと取り巻く生徒たちを割き、そばに寄った

「おはようハヤテ。朝から何だか騒がしいな。何かあったのか？」

「いえ、特に変わったことは……」

ナギは慎重に当たり障りのない会話をしながら情報を収集していったとした

しかし担任教師 桂雪路 が入ってきたことでそれは遮られてしまった

「はーい席着いてーホームルーム始めるわよー」

仕方がなしにハヤテを始めとするクラス全員は席に着き始めた

「じゃあ居たら返事してねー」

しかし雪路は全員が座るのを待たずに出席確認を開始する

「……なんと締まりのないクラスだろうか。」

そんなことを思いながら話を聞いていたナギは雪路の声のトーンが少しおかしいことに気がついた

よく見てみると雪路の頬は少し赤らんでいるのが分かる

さらに見てみると教卓の前に座る生徒の顔が少し歪んでいるようにも見える

こうなれば次に起こることはナギならば容易に想像できる

が、それは元の世界であればの話だ

ナギは何も言わずにヒナギクへと視線を移した

「やはりな……」

ナギは誰にも聞こえないくらいで呟いた

ヒナギクは顔を机に伏せていた

授業ではないので必要のない教科書を立てて顔を隠しながら

元の世界ならばホームルームの最中に居眠りなどするはずのないヒナギクが眠っている

しかしもうナギは驚かない

ようやくこの世界に慣れてきた実感を得ながらナギは思わず自分を

誉めたくなつた

「桂ちゃん！朝からお酒はダメだよ！」

そんなとき注意役を果たしたのは変わらず委員長をつとめている泉だつた

「堅いこと言わないでよぉ～いいんちよさぁ～んっ」

「だめっ！」

泉の一喝でしゅんとした雪路とは対照的にクラス中は笑顔になつた

「自分の在籍するクラスが騒がしいということだけは変わらないな……」

そつ思いナギは思わず顔を綻ばせた

第二十話（前書き）

週一更新途切れたあ？

まさか携帯止まるとはな……（、・ω・、）

第二十話

「やっと終わったあゝ」

校内に4限目終了のチャイムが響き、それと同時にヒナギクは伸びをしながらそう言った

「いや……あの……ヒナ？まだ説明が途中なんだけど……」

世界史担当教師兼ヒナギクの姉 桂雪路は実の妹に授業を妨害され少し困った表情をする

しかし

「もうチャイム鳴ったも〜ん。」

ヒナギクはおどけつつ席を立った

「じゃっ、それでは〜」

そう言いヒナギクは脱兎の如く教室を去った

「ち、ちよつとヒナ！！待ちなさ……」

しかし雪路の声は静寂に包まれている教室に寂しく木霊する

「もういいわ……委員長。」

「起立」

「礼」

「ありがとうございました」

定形句をクラス全体・1が一斉に述べ

今、この瞬間に授業は終了した

「なんだかな……」

ナギはそう嘆息しつつもこんな新鮮な光景をほんの少しだけ楽しんでいた

「ナギちゃーんお昼食べよう」

「ん、あ、ああそうだな。」

突然に声をかけられても徐々に対応できるようになってきているのはナギの素質だろう

もはや誰も彼女を変だと思うことなどそうそうしない

たった一人を除いては

「今日の泉の弁当は……おっ、これは私がもらったあ！」

「あつ、理沙っ！！ならば私はこれだあ！」

泉は弁当箱のふたを開けると、すぐさま理沙と美希がおかずを二品抜き去り口に運んだ

「ああっ！私のハンバーグとからあげ！！」

弁当のメインを食べられてしまい泉は少し目を潤ませた

そんな泉に対して二人は「うまい！」と感嘆の声をもらす

「虎鉄君が作ってくれたハンバーグ……」

しかし今にも泣き出してしまいそうな泉に気づき、二人は慌てた

「わああっ！！泣くな泉！！」

「私たちのおかずもどれでも好きなだけやるから！！な？」

と反射的にそう言ったところで二人は硬直した

「しまった……」と

「……好きなだけ？」

二人の言葉を聞いたとたん泉は泣き止み、二人の弁当箱を奪い取った

「じゃあ……これと、これ……それにこれと……えーい全部貰っちゃえー!」

そして泉は弁当箱を二人に返した

米部分を除く全てのおかずが抜き取られた弁当箱を

「理沙ちゃんも美希ちゃんのもおいしいね。」

「「そ、それは良かった……」」

パクパクと箸を進めながら満面の笑みを浮かべる泉を見て二人は目を潤ませつつ笑いかける

「なあ美希……私の弁当が梅干し一つと白米の紅白弁当になってるよ……」

「お前はまだいいよ……私なんて梅干しもないんだぞ……真っ白だ……」

美希が弁当箱を見せると見事に白一色だった

これには完全に我関せず姿勢だったナギも口を開いた

「……降伏弁当だな。白旗だけに」

「え、何に負けたの? ねえねえナギちゃん、理沙ちゃん、美希ちゃん教えて」

ナギの言葉を聞いた泉は不思議そうに返してきたが、意図せずに三人は声を揃えて言った

「「「お前にだよ!!」」「」」

「……ふえ?」

第二十一話（前書き）

最近他作品にも手を出そうかと考えてます

でも……うん

（・ω・）

第二十一話

「そういえばハヤテはどこ行ったんだ？」

弁当を食べ終え、それを片付けながらナギは辺りを見回した

しかしハヤテの姿はどこにもない

「多分今頃……なあ？」

「中庭……」

「……だね。」

ナギの疑問に三人は互いに顔を見合わせながら答えた

「はいハヤテ君あーん……どう？美味しい？」

「ええ。とっても美味しいですよ。じゃ僕もはい、あーん。」

中庭のベンチに並んで腰掛けながら、互いの作った弁当を食べさせ

あっているのは綾崎ハヤテと春風千桜の兩名

4月時点では中庭で昼食をとる生徒は少なく、大いに賑わっていた

しかし一ヶ月経過し5月となった今では二人以外に生徒の姿はない理由はもちろん残った二人にある。ただ単純に耐えられないのだ

どちらかが口周りに何か付けようものなら相手がそれを取り口に運んだり

千桜が口移しで果物をハヤテに食べさせたり

軽いものから酷いものまで数多く二人は周囲に居ることが恥ずかしくなってしまうくらいに甘々とイチヤイチャし続けた

また別のカップルが隣のベンチで食事をしたところ、二人の甘ったるい気にあてられて半狂乱になった例もある

そんなバカップルは周囲をまったくもって意にも介さず何を言われようとも決して反応しなかった

それこそまるで別空間に居るかのように

そんな中庭は次第に二人だけの空間へと変わっていった

白皇の生徒達は昼休み限定で中庭のベンチに現れるこの場所を畏怖の念を込めて『閉鎖空間』と呼んでいる

しかし、ふんもつふなアイツでさえもこの閉鎖空間に干渉することは叶わない

そんな閉鎖空間の醸し出す空気に耐えられず、いつからか昼休みの中庭には人が寄りつかなくなっていた

「ごちそうさまでした。」

最後の一口を食べ終え、ハヤテが千桜に感謝を述べた

「じゃ教室に戻るっか」

そう言って千桜はベンチから立ち上がったが、已然座ったままのハヤテに手を掴まれてしまった

「千桜さん、僕デザートが食べたいです。」

ハヤテがそう言うと千桜は少し困った表情になった

「あつ、ごめんハヤテ君……今日は用意してなかった……」

「……………」

申し訳なさそうに言う千桜からはハヤテの表情を伺うことも出来ず、黙ったままのハヤテは怒っているようにも見えた

「嫌われてしまうかもしれない」そんな印象を千桜は受けて涙目になる

「ハ、ハヤテ君……その……」

千桜の言葉を遮るようにハヤテはスツと立ち上がった

「……………いただきます。」

「えっ？」

不意に放たれた言葉の意味を理解する前に千桜の思考は停止した

「ごちそうさまでした。」

重なり合っていた二つの唇はそっと離れた

「ふぁ……」

その途端に千桜の体は糸が切れてしまった人形のようにふらりとハヤテにもたれ掛かるような形で倒れた

千桜の表情は何かに酔っているかのように目の焦点があっていない

「よつと。」

ハヤテは自身の腕の中にポーツとしている千桜を抱き抱えると、満足したような表情を浮かべて教室へとその足を向けた

第二十二話（前書き）

書いている自分で言うのもなんですが、展開がダラダラしすぎですよね（´・ω・´）

近いうちに一話完結の短編とか書きます（二週間後を目処に）

話は変わりましたいつもの戯言

トリビアの泉はおもしろいですね ウォッシュレットとかマッチ10万本とかには吹きましたよwww

第二十二話

一日の授業がすべて終わり、終礼を行っている教室でナギは少し苛立っていた。その原因はもちろんハヤテである

昼休みが終わりに近づいた頃、ハヤテは千桜にお姫様だっこをして教室に入ってきた

そして千桜を席に着かせた後は別の女性徒と仲良さげに会話を始め、そのまま昼休みは終わりを告げた

ハヤテは教室に戻ってきてからは他の女といちゃつき、なおかつ自分のところに来なかったのだ

嫉妬深いといえはそれまでだが、自分の意中の相手が自分以外の異性といちゃつくのは気分の良いものではない

周囲の変化にも徐々になれてきたと感じてはいたが、どうにも許容の範囲を超えている

苛立つ気持ちを抑えつつナギはふうと一つため息をついた

するとそんなため息が聞こえたのか隣に座っていた 橘ワタル が話しかけてきた

「どうした？ため息なんかついて。お前らしくもない。」

「退屈なんだ。私だってため息くらいつく権利はあるさ。」

ナギの言葉にワタルは「ほう」と感心したような声をもらした

「ずいぶん余裕なんだな。…… まあアイツが生徒会長のうちは覇権交代なんて起こらないだろうから当然か。」

「ああ。」

ナギは考えていた。苛立ち、熱くなっていた頭を急速に冷やしながらまた同時にワタルとの他愛のない会話が途切れないように細心の注意を払いながら聞き覚えのない単語の意味を

『覇権交代』

イントネーションからすぐに字は浮かんだ。しかしその意味がよく

分からなかった

そこでナギは瞬時に策をいくつか練り、リスクの低い策をワタルにぶつけた

「覇権交代か……誰が使いだしたんだろうなそんな言葉。」

ナギは教卓に伏せながら寝息をたてている雪路に代わってホームルームを遂行しているハヤテに目をやりながら言った

「まあな。でも行政じゃないんだから政権交代じゃおかしいだろ。」

ナギは様々な情報を泉達との会話から得ていた

ハヤテ率いる第一生徒会と虎鉄率いる第二生徒会の二つの生徒会があること、元の世界にはない行事が数多く存在していること。

そして今日は行事の一つ『両会協議会』の日であること

学校運営の実権、つまりは覇権を握るのは第一生徒会であるが、第一か第二かを決めるのはこの両会協議会が深く関与している

この後に行われる両会協議会は校内に生中継され、その終了後に全校生徒による投票が行われる

投票結果によって第一・第二生徒会が入れ替わる。つまり学校の覇権が入れ替わるのだ

おそらくはこのことを『覇権交代』と呼ぶのだろう

ワタルの言った一単語だけで答えを導き出し、そうナギは確信した
「それではこれでホームルームを終了しますが、引き続いて両会協議会に移りますのでそのまま席に着いていてください。」

ハヤテがそう言うのとヒナギクたち生徒会役員は立ち上がった

ナギもそれに引き続いて立ち上がったが、ワタルが同時に立ち上がり少しめんどくさそうに口を開いた

「結果は見えてるかもしれないが手加減はしないからな。全力で覇権を取りに行く」

突然の宣言に面を食らっているナギをよそにワタルはとどめの一撃を繰り出した

「たとえ愛するお前が相手でもな!!」

この瞬間にナギの苛立ちは完全に消え去り、代わって驚きがナギを支配したナギの苛立ちは完全に彼方に消え去り、驚きがナギを支配した

第二十三話（前書き）

『涼宮ハルヒの驚愕』がザ・スニーカー6月号に一部載るそうです
ね（・ω・）／

発売延期からちょうど1000日目での発表だったので複雑ではありましたが、ともかく4月30日が楽しみですww

今週も不知火の戯言をお送りしましたm（| |）m

第二十三話

「それではただいまより両会協議会を開催します」

議長を務める生徒がそういった瞬間、校内が歓声につつまれた

その歓声は高レベルの防音設備を整えている会議室のナギの耳に届いていることから分かる

数秒経つことにその歓声はさらに大きくなっていき、まるで校舎が揺れているかのようにナギが感じ始めた

その歓声は各教室に教師が止めにはいるまでやまなかった

「改めましてこれより前期両会協議会を始めます。一同礼。」

感情が見えない冷たい議長の視線はまずハヤテへと向けられた

それに対しハヤテは愛歌に目配せをし、愛歌もそれに頷いた

「会計担当の霞愛歌です。まず今期の予算案から提示させていただきます」

きます。」

愛歌は学校行事や備品購入費、光熱費、生徒会運営費などの必要経費を順にリストアップしていき、予算案を提示した

「以上が今期の予算案です。」

愛歌が発言を終え、席に着くと第二生徒会会計職 東宮康太郎 は立ち上がり異議を申し立てた

「異議あり。霞さんの予算案は概ね納得のいくものでしたが、生徒会運営費についてはあまりにも内容が不明確であり、さらに金額も全体の10%を占めているなど納得できかねます。よって第二生徒会は減額を要求します。」

そう言い終わった東宮はどうだと言わんばかりにふんぞり返った

そんな東宮を見たヒナギクは先程までボーツと座っていただけの状態から一変し、眼光を鋭く光らせ、東宮に噛みついた

「ご立派な意見だけど……後ろ手に隠してる携帯電話は今必要ないんじゃない？ねえ東宮君？」

そう言つてペロリと舌を出し、妖しく笑ったヒナギクの表情はナギの知っているものではなく、瞬時に『サディスト』という単語を連想させた

しかし中継カメラがそんなヒナギクをとらえた瞬間に再び校内で一瞬歓声があがったのをナギは聞き漏らさなかった

どうやらこちらでもヒナギクはベクトルが違うとはいえ、かなり人気があるようだ

そんなことを一瞬考えた後、ナギは再度会議に意識を戻した

「野々原さんの言葉をオウム返しするだけならあなたじゃなくてもいいんじゃないですか？」

すると抜群のタイミングで千桜がヒナギクに続き東宮にたたみかけるように言葉を浴びせる

そんな二人の言葉に東宮は隠すこともなくバレてる！と慌てた表情を見せた

東宮はこちらの世界でも若干ヘタレのようで、先程の意見も通話状態にしておいた携帯電話で野々原が言ったとおりに繰り返したただだったのだ

「ちっ……余計な真似を……」

虎鉄は結果的に旗色を悪くしただけの東宮を一瞬だけ睨み、すぐに視線をそらした

「第二生徒会、予算案については承認と言うことでよろしいですね。」

議長の抑揚のない声が虎鉄に向けられ、東宮はがっくりと肩を落とした

しかし

「いや、異議ありだ。」

虎鉄は懷からジョーカーを取り出し不敵に笑んだ

第二十四話（前書き）

戯言のコーナー

とある魔術の禁書目録の20巻読みまして……

やっべえええええ！！

21巻はいつですかああ！！

てな感じに発狂しかけますた（・ω・）／

第二十四話

「いや、異議ありだ。」

虎鉄は懷から封筒を取り出しシニカルに笑いながら机に置いた

見覚えのない封筒に東宮やワタルまでもが目丸くする

「これは前回の生徒会運営費についての資料だ。」

「この備品購入の項目だが調査の結果、副会長の両名が携帯ゲーム機 忍天童ES を購入し、生徒会室で使用しているとの報告が出た。」

虎鉄の発言が終わると校内にざわめきと動揺が広がった

横領 事実ならば許されざるものであることは誰もが解するところ

「辞任しやがれー」

「最低ー」

「今すぐやめろー!」

校内では罵声が飛び交い、誹謗中傷の雨がハヤテらに降り注ぐ。その喧騒は先程の比ではなく暴動ともいえるようなレベルに達していた

しかしそれでも議長は動かない。何事もまったく意に介さないように冷淡な眼を変えない

議長の対面でナギは苦悶の表情を浮かべていた

自分ではない自分が横領したと言われている。しかしどうにもそれを信じる事ができなかった

「第一生徒会。反論はありますか？」

ようやく口を開いた議長の言葉にもハヤテは口を閉ざしたままで何も語らない

「このままではいけない。」

ナギはワタルに視線を移した

「愛するお前」と

確かにワタルはそう言った。ナギに向けて、ナギの瞳に向けて

しかし今はこちらを優先することを選択し、整理のついていない頭脳をフル回転させる

「……ハヤテどうするつもりだ？」

「まあ今日はヒナギクさんの独壇場ですから僕たちは傍観者でいま

しょう。」

小声で二人は言葉を交わした

「瀬川君。その資料は確かなんですか？それに出所は？」

千桜の質問に答えることなく虎鉄は勝利を確信した目でハヤテを一瞥する

「第二生徒会。情報の出所はどこですか？」

自らの左前方から響いた声に虎鉄は一瞬だけピクリと反応した

まるで虚を突かれたといわんばかりに

「……抱えの情報屋だ。これ以上は控えさせてもらう。」

それに伴って虎鉄の表情が変わった。勝利を確信した余裕の笑みから予定外の出来事に戸惑うように

もちろんそこにつけ込むようにして泉たちは虎鉄に質問をぶつけたが、すべてはぐらかされてしまった

しかし目的は虎鉄を質問責めにし、ボロを出させることではない

「ある程度時間をかせぐことはできた。」と泉達はヒナギクの方に

視線を向けた

「お膳立ては十分。そろそろひっくり返すわ」

ヒナギクの表情を見たナギにはそんな声が聞こえた気がした「そろそろ本当のことを話しましょうか？」

ヒナギクはスツクと立ち上がり机に乱雑に散っている虎鉄の資料を手を取った

「確かにこれはゲーム機購入。だけど私的利用が目的じゃない」

「じゃあ何だっけ言うんだ？」

ヒナギクの発言にワタルが噛みつくも議長役の生徒がそれを制し、ワタルは口を噤んだ

「最後まで聞けば分かるから」

ヒナギクの目には確信をもった輝きがあった

「これはとあるアメリカの高校の話。あるクラスは成績も常に下位。宿題を出してもほぼ全員が提出しなかったそうよ。」

「ただど新たに担任になった一人の教師はある方法をつかうことで全員が宿題を提出するまで更正させ、なおかつ成績も上位まで引き上げた……」

「その方法は……一体何だと思う？」

ヒナギクは虎鉄に向けて問いかけたが、虎鉄は分からないというようにばつが悪そうに目を反らす

それを見たヒナギクはニタリと笑みをこぼし、ゆっくり口を開いた

「答えは宿題を携帯メールにした。担任教師は生徒全員に宿題メールを送信し、それに答えをつけて返信させたの。」（実話ですby 作者）

答えを聞いた東宮は「へえ」と声を漏らしたが、虎鉄とワタルはまだあらがう

「だがそれと今回の購入には一切接点がないだろう？いいかげん」

虎鉄の言葉を遮り、ヒナギクは発言を開始した

「私が言いたいのは意外性と親しみやすさは勉学に良い影響を与えているということです。」

「次回の生徒総会で提案予定でしたが、私たち第一生徒会は毎朝希望者にES及び付属の英単語・漢字暗記用ソフトウェアの貸し出しを行おうと考えていました。」

「しかしまずは効果を実証してみないと提案できません。そこで私たちは自身をモニターとし、実験を行っていたのです。」

この発言の後、虎鉄は口を噤んでヒナギクの隣に控えている女生徒

を睨みつけた

第二十五話（前書き）

生徒会の火種も買えたし、とある科学の超電磁砲は鳥肌が治まらな
いし

実にいい日です（^ε^）

第二十五話

「勝負ありね。」

ヒナギクは自身の髪をかき揚げて虎鉄に視線を移した

虎鉄は震えていた。だがそれは敗北の苦渋を味わっている表情ではなく、怒りに満ちたものだった

「……謀りやがったな花菱いい!!」

虎鉄は美希に鋭い眼光を向けたが、美希は「ふふん。」と鼻を鳴らした

「いやあ虎鉄君。私がヒナを悲しませるような事をするわけがないだろう?」

「（まあ私はハヤ太君の失墜は望んでるからヒナが望めば……）」

そう思いながら美希はヒナギクへと視線を移す

「今回の君の台詞の監修は全部私がやらせてもらっていたようなもの。その資料もまるでこちらが隠し事をしているかのように作ったんだ。」

「この俺を……はめやがったってのか……」

虎鉄の言葉から力強さが抜け落ちていく

「瀬川君、西遊記を知ってるでしょう？そのなかの一節で孫悟空は釈迦の手のひらの上で暴れ回っていただけで勝ち誇っていたそうよ。」

まるでスイッチが切り替わったかのようにヒナギクの目が再び妖しく光始める

「あなたはぜひんど可愛く踊ってくれたわね、少しは楽しめた、ありがと。」

ヒナギクがウインクをすると虎鉄は膝から崩れ落ちた

「……今回こそ勝てると……」

「どうしてそこまでして覇権交代を成し遂げたいんだ？」

力無く呟く虎鉄にナギが疑問を投げかけると、虎鉄は不適に笑いだした

「……どうしてだ？そんなもん決まってるだろ。俺が第一生徒会長になって……」

「綾崎を副会長に据えて仕事という大義名分のもとあんなことや…
…おぶっ!!」

虎鉄は最後まで言い切ることは出来なかった

疾風がその場にまき起こり、校内に生中継されていた映像が切断されたかと思うと、突然虎鉄の顔面がひしゃげて意識を刈り取ったからだ

原因を考えているナギは自分のすぐ横で息を整えているハヤテを見ようとしていない

元の世界同様に容赦のよの字も持たないハヤテの攻撃に感服と同時に恐れを抱いたからだ

ワタルや東宮も呆れた様子で完全に戦意を失っていて、虎鉄の心配しているのは妹の泉だけである

「こ、虎鉄くうーん！！死なないでー！！！」

もちろん予算案は可決となり、無事に両会協議会は幕を閉じた

第二十五話（後書き）

来週からはサブストーリーをやっつけていこうと考えてますので、よろしければお付き合いください。――＊――。

綾崎ハヤテの苦悩（前書き）

今回はメインストーリーから外れたサブストーリーをお送りします

内容は……魔が差したといったところですm（　　）m

綾崎ハヤテの苦悩

もう限界だ。我慢できない。このままでは僕はどうにかなってしまう

白皇学院の象徴たるガーデンゲートが生徒会室、広大な広さを誇っているにも関わらず生徒会長の僕は一人寂しく仕事をしている

だがそれももう限界だ。溜まるものも溜まってしまっていて自分の仕事にも集中できていない

彼女に応じてもらえるといいのだけれど……

「……ヒナギクさん。」

「あ！ハヤテ君。やつほ」

いつも通りに彼女は一人ベンチに腰掛けていた

僕に向けられるその笑顔はまさに天使。思わず抱きしめたくなるが、僕は自分を律する

「どうかしたのハヤテ君？」

「ヒナギクさん。僕は……もう」

自分でも声と手が震えているのがよく分かる。その手をそつと彼女の両肩に添えて僕は声を絞り出す

「……我慢……できません。」

「ハ、ハヤテ君!？」

この赤面する表情をいつまでも見ていたいのが、今は優先しなければならぬことがある

言え、言うんだ!綾崎ハヤテ!

「ヒナギクさん真剣に聞いてください。」

僕がそう言つと彼女も一度唾を飲み込むような仕草を見せた

「ヒナギクさん。僕はもう限界です。……溜まってるんです。」

「してもらつても……いいですか？」

よく言つたと自分を褒めてやりたいね。やつと言えた、後は彼女が了承してくれるかどうかだけど……

「○ ∞ ♀ × ! ! ?」

地球圏外の言語を解していない僕には彼女の発する言語の意味を理解できない

この慌てふためくかわいい子猫を愛でながら待つとしよう

「本気……なの？」

頭を撫でたり愛でること数分、日本語で尋ねてきた彼女にコクと頷く

「だ！だってあなたには……理事長が……」

「彼女では駄目なんだ!!」

思わず声が大きくなり、僕は彼女の手を取った

「僕はヒナギクさん。あなたにしてもらいたい……いや一緒にしたい。」

僕がそう言つと彼女は顔を先程よりも紅潮させた

彼女が黙り込んでからのどのくらい経ったかは分からない。それが五分だったのか、一時間だったのか

ともかく僕には長く感じた時間はようやく終わりを告げ、彼女は口を開いた

「……分かった。私も覚悟を決めるわハヤテ君。」

「本当ですか！？やった！やったぞ！」

嬉しさのあまり叫んでしまったが、すぐに僕は平静をとりもどし、彼女の手を取る

「では……行きましょうか。」

彼女は恥ずかしそうに俯き気味に頷いた

さあ今から二人だけの楽しい時間が始まる。思わず顔が綻んでしまふ、生徒会室には僕ら二人だけだ……「だめよハヤテ君！！そんなの無理！考え直して！！」

彼女の訴えを僕は退ける。何故なら先程了承は得たのだから

「逃げられませんよ。さあ溜まったコイツを処理してください。」

溜まり溜まって大きくなったものを見せながら彼女に近づいていく
少々おびえているようだが、もうなりふり構ってられない。僕も
もう限界なんだ

「いつ、いやあああああ」

「もう駄目……一歩も動けない……」

机にへたりと倒れ込み、そう呟く彼女

そこまでハードではなかったと思うんだけどな

書類整理なんて単純作業……まあ量が量だけにかなり大きくなって
山と化しているけど

ヒナギクさんは毎日仕事をサボってゲームをしたりしているので一
人に与えられているノルマに全く届いていない

だから僕が彼女の分もこなしていたのだが、それにも限界がある。
したがって書類が溜まっていつてしまったのだ

だから勇気を出して言った。彼女の楽しみの時間を奪うようで心苦

しかつたが決意して言った

仕事を一緒にしようと

「お疲れさまでした。」

ヒナギクさんは仕事を小さなミス一つなく完璧にこなすことができる人だ。ただやる気が皆無なのでサボっているだけ

今も机にへたりとしながら「ふにゃあ」と愛らしく声を出しているが、実際は疲れなんて微塵もないだろうに

まあそこがかわいいんだけど

「ヒナギクさん。」

「な〜に〜?」

僕はゆっくりと体を起こした彼女の唇を奪った

楽しかった仕事の時間はこれでおしまい

今からはとても楽しい二人だけのプライベートタイムだ

綾崎ハヤテの苦悩 sideヒナギク（前書き）

魔が差した前回の別視点です

ハヤテがヒナギクにどう思われているかがテーマになってるかもしれませんが、ただの悪ふざけかもしれませんm（＿）＿m

↓以下戯言↓

関西在住なのでもうすぐAngel Beats！が放送されます（＾ω＾）

麻枝准さん原案なのでめちゃ期待してます

主題歌もアニメ版CLANNAD After同様 Liaさんなので早くフルが聞きたいですね（・ω・）wktk

綾崎ハヤテの苦悩 side ヒナギク

普段と何一つ変わらない放課後の一時。私はいつもの場所で買ったばかりの新作ゲームに興じていた

ただこのシリーズは操作法が通してまったく変わらない。なのでシリーズ玄人の私にはちよつと退屈……

ステージクリアの華々しい文字もなんだかパツとしない

何か刺激的なことないかな

神様は私の味方みたい。向こうからハヤテ君がやってきた

「あ！ハヤテ君。やつほ」

少しハヤテ君の表情が堅いような……疲れてるのかな

「どうかしたのハヤテ君？」

「ヒナギクさん。僕は……もう」

彼は私の肩に手を置くと息が直接かかるくらいに接近してきた

「我慢できません。」

「ハ、ハヤテ君!？」

こゝこんなに近くにハヤテ君の顔が……でも我慢ってなんのこと？

「ヒナギクさん。真剣に聞いてください。」

彼の表情が真剣なものに変わった。ただならぬ雰囲気にも思わず唾を飲み込んで彼の言葉に備えようとする

き、緊張で心臓が破裂しそう……

「ヒナギクさん、僕はもう限界です……溜まってるんです。」

「してもらっても……いいですか？」

な、なななななあ!？

シてもらってもいいですかっ!？

何をいきなり言ってるの!?

こんな白昼堂々と。しかも学校で!?

「○ ∞ ♀ × ! ! ?」

知らず知らずのうちに意味不明かつ、発音すらも不明の声が漏れていた

私の頭はまるでショートしてしまったかのように働くことを放棄してしまったのだ

そこから私が正気を取り戻すのにかった時間は分からないけれど、気づけばハヤテ君が私の頭撫でてくれていた

……もう少しだけ、ほんの少しだけなら……いいよね?

「本気……なの?」

彼を受け入れる意を決して彼に問いかけると間髪入れずに頷かれた

「だっ! だってあなたには……理事長が……」

「彼女じゃ駄目なんだ!!」

手を強く、強く握られた。真剣な眼差し……初めてかもしれない彼のこんな表情を見るのは……

「僕はヒナギクさん、あなたにしてもらいたい……いや一緒にしたい。」

正直なところ彼のことが好きな私としてはこの申し出は嬉しい。でも……

ってハヤテ君!?!そんな潤んだ目で私を見ないで!

男の人は潤んだ上目遣いに弱いつて聞いたことあるけど、あながち男の人だけじゃないかも……

うつつ……天王洲さんごめんなさい私……もうダメ……

「……分かった。私も覚悟を決めるわハヤテ君。」

「本当ですか!?!やった!やったぞ!」

ハヤテ君は飛び跳ねた。彼がこんなに喜ぶところなんて始めてみた気がする

恥ずかしいけど嬉しいな……私と結ばれることをこんなに喜んでくれるなんて

彼に手を引かれながら私は生徒会室に向かった最初に言っておくわ、

盛大な勘違いだったって

そうよねハヤテ君は天王洲さん以外眼中にないものね

それにしたって……これはめんどうだわ

「だめよハヤテ君！！そんなの無理！考え直して！！」

「逃げられませんよ。さあ溜まったコイツを処理してください。」

そんなに仕事したら……絶対疲れちゃう……逃げなきゃ

ひなぎくはにげだした。しかしまわりこまれてしまった

「いつ、いやあああああ」

「もう駄目……一歩も動けない……」

やっぱり疲れたあゝ
仕事きらい
ハヤテ君もきらい

「お疲れさまでした。」

優しく微笑む彼は素敵。でも彼は本当の笑顔を私に見せてはくれない

「ヒナギクさん。」

「なに〜?」

ズルい。本当にズルい。反則。レッドカードで退場

いきなりキスするなんて絶対に反則。……許しちゃいそうじゃない
だけど今、私に向けられている笑顔は偽りのもの、作られた彼の仮
面のひとつにすぎない

私の愛しい人は笑顔という仮面を付けた道化師。決して素顔を見せ
てはくれない。

だけどそれでもいい。それでも私は……

大変だった仕事の時間はこれでおしまい

今からは私のアピールタイム

いつかはあなたの仮面の下、本当の笑顔を見せてよねハヤテ君

私はあきらめないからね！

第二十六話（前書き）

『麻枝准』

この人が書くものにはぐつとくるものがありますよね

感動であったり笑いのセンスであったり

現段階では酷評されてますけど、番組終了時にはそれがどう変わるのかに期待します（＾ω＾）

第二十六話

道行く人の影も疎らな早朝、鷺ノ宮邸の客間では二人の人物が顔を会わせていた

一人は顔には幼さが残るものの気品に溢れ、美少女という言葉がふさわしい鷺ノ宮家令嬢の鷺ノ宮伊澄

もう一人は筋骨隆々としている黒服の男。しかし伊澄が話しているのはこの男ではなく、男の主だった

「そろそろ力は完全に君のものになったんじゃないか？」

「ええ、これでようやく私がナギに変わってハヤテ様のお側に……」

伊澄は携帯電話を持ちながら顔を赤らめ、少ししてから話始めた

「……ですが、あなたは何故私に協力してくださったのです？」

「あなたは一体何を企んでいるんですか？」

伊澄の目が疑心に染まる。協力者とはいえ伊澄は信用のしの字さえ相手に寄せてはいないのだ

そんな伊澄の心を知ったように電話の向こうの声は軽くおどけるよ

うにして答える

「まあ何か企んでいるのは正解だ。だがな……それが何なのかは教えられない。契約外事項というやつさ。」

電話からものはつきりと伊澄には敵意が伝わってきて、それに伊澄は顔をしかめた

「ま、うまくやりなよ。私は私で動くからさ」

そう言つと通話が切られ、伊澄の耳に機械的で無愛想な音だけが響いた

「まあいいでしょう。今は泳がせておきます。」

伊澄は鋭い視線を男へ向け持っていた携帯を差し出した

「こんなことをしたところで私はあなたの主が誰かなんて掴んできませんよ?」

伊澄は不適に笑うが、男は表情を変えことなく携帯を受け取るとその場を後にした

伊澄は相手の番号を知らない。連絡は常に相手からでそのたびに同じ男がSPに連れられて通話中の携帯を部屋に持ってくる

伊澄にとっては相手が誰かなどはどうでもいいのだが、この方法は気に入らなかった

しばらくした後、伊澄の部屋に再び来客があった

しかしその客は先程の無愛想な男とはかけ離れた優しい表情の自らの母親であった

「伊澄ちゃん？どこか出かけるの？」

伊澄の母 鷺ノ宮初穂 はおっとりした様子で伊澄に問う
そんな母に深いため息をつき、伊澄は答えた

「お母様……今日は月曜日なので今から学校です！」

「あら〜そうだったかしら？」

「ともかくもう行きます。」

伊澄は確かに自分の頭が痛くなるのを感じた

「あらそう？じゃあ……いつてらっしゃい」

伊澄は車の後部座席に乗り込むと窓を開け、顔をのぞかせた

「お母様、今日は帰りが遅くなりますので……」

「何か用事でもあるの？」

母親の言葉を聞いた伊澄からは年相応のあどけない表情が消え去り、怪しく艶やかな表情が表れた

「はい。今日はナギと……遊んできます……」

伊澄を乗せた車は白皇学院に向けて走り出し、三千院ナギの波乱の一日が幕を開けた

第二十七話（前書き）

〔戯言コーナー〕

ハヤテのごとく！23・24巻のサービスパック買ってきました（
^ω^）

予約はしていませんでしたが手には入ってよかったです

あと、かつてに改蔵の愛蔵版が出たんですけど……結局買わず
じまいです（´・ω・｀）ドウシヨウカナ

第二十七話

「……ハヤテ、空を飛部と重音部から部費増額の要求がきているんだが……」

ナギは目安箱と書かれた箱から生徒からの寄せられた意見や要望を読み上げている

「重音部の活動は基本にお茶会なので却下、空を飛部にいたっては部として認めていないので論外です。」

ハヤテは年間の活動計画書を作成しながらもナギが読み上げる意見・要望書に答えていく

放課後の白皇学院生徒会室には現在はハヤテとナギの二人しかいない

ナギは授業が終わり、早急に帰ろうとしていたが、ハヤテに導かれるようにして生徒会室に赴き、仕事を手伝わされている

ナギは事件に関与している人物を除いたこの世界の住人に怪しまれては存在が消滅してしまうからだ

騙し騙しやってきてはいるが、この設定は決して消えないのだ

「ナギ〜鷺ノ宮さんから伝言よ。」

そう言ってひょっこりとヒナギクが扉を少しだけ開き、顔をのぞかせた

「話があるから教室で待ってるって」

ただそう伝えてヒナギクはハヤテがこちらに微笑みながら向かってきているのを確認すると、脱兎の如く去っていった

「ハヤテというわけだから私も行ってくるぞ！」

「あっ！お嬢様まだ仕事が……」

ナギもハヤテにそう言っ て目安箱を放り出して生徒会室を後にした

「一人になっちゃったなあ〜」

一人部屋に取り残されたハヤテは寂しそうに呟いた

「しかたがないなハヤ太君は……」

ハヤテの呟きに呼応するように生徒会室の扉が開いた

「敵か味方か！？風紀委員ブラック 朝風理沙！！」

ばばーん と更に付け加える理沙の登場にハヤテはポカンとする

「……何だハヤ太君？リアクションくらいくれてもいいんじゃないか？」

派手な登場を演出したにも関わらずリアクションもせずポカンとしているハヤテに理沙はむくれる

そんな表情を見てハヤテは笑みをこぼす

「理沙さんちようどよかったです。一人は退屈でして……」

そう言つてハヤテは棚からチェス板を取り出した

「休憩がてらお相手願えますか？」

そんなハヤテの言葉にむくれていた理沙の表情は一変して笑みへと変わる

「ほう……この私にチェスで勝負を挑むとは……ハヤ太君、覚悟は出来ているんだろうね？」

「敗者は勝者の命令に従うんですよね？了解してます。」

二人は不敵な笑みを浮かべると、チェス板を挟み対面に座った

「私は黒をもらつぞ。」

「はい、僕は白でいきます。」

駒を板上に配置し、二人の勝負の幕が切つて落とされた

第二十八話（前書き）

「前書き」という名の戯言

『緋弾のアリア』
がアニメ化するそうです

また読むときに脳内補完される作品が増えますなww

レキいいよレキ（＾ω＾）
でもジャンヌも……

第二十八話

「これでクイーンは陥落つと。」

「しっ、しまった!!」

前半こそ怒濤の攻めでハヤテを苦戦させた理沙だったが、勝負を決定づけることはできず、次第に押され始めた

「ま、待ってくれハヤ太君……」

「チエック……メイト。」

眼光鋭いハヤテは理沙のキングの周囲を白く染め上げた

「僕の勝ちですね。」

そう言つて笑うハヤテの表情が理沙にはとても恐ろしく見えた

「ハ、ハヤ太君……流石にこの格好は恥ずかしいというか……なん
というか……」

顔を赤らめてもじもじとする理沙はスカートがあまりにも短いフルタイプのメイド服に身を包み

そしてそんな理沙の姿を見てハヤテは理沙のお株を奪うようにしてニヤニヤとしている

「ダメですよ理沙さん、僕のことはご主人様って呼ばないと……おしおきですよ？」

「うつ……」

ハヤテの要求は理沙に罰ゲームとして3時間の制限付きでハヤテのメイドとなることだった

「さ、理沙さん紅茶でも入れてください」

ハヤテはそう言って満面の笑みを理沙に向ける

「うつつ……」

たじろぐ理沙だったが、覚悟を決めたように一息ついて

「か、かしこまりました……ご、ご主人様……」

負けじと満面の作り笑いを浮かべて準備を始めた

「お待たせしました。アールグレイです。」

数分後、理沙は紅茶とクッキーを持ってハヤテの元に戻ってきた

ご主人様という単語に理沙からは若干の照れくささがうかがえ、ハヤテは紅茶を飲みつつそんな理沙を見て至極満足そうに微笑む

「理沙さん紅茶入れるの上手ですね。」

「ご主人様は千桜さんにも同じことを言っていたが？」

理沙はハヤテにいたずらな笑みを見せ、ハヤテは痛いところをつかれたと目をそらした

「ごちそうさまでした。」

紅茶と共にクッキーもたいらげ、満足したハヤテが理沙に言うつと理沙も軽い会釈でそれに応え、カップと皿を下げるとハヤテは再び仕事に取りかかろうと机に向かった

だが、その途中でハヤテは激しい目眩に襲われて立ち止まった

「ぐっ……な、何だ……？」

意識が遠退いていくとハヤテは感じていたが、原因を考えようにも頭がすでに働かなかった

「どうした？大丈夫かい？」

だがハヤテは理沙の言葉に返事をすることなく、ドサリと音を立て倒れた

そんなハヤテを見るや否や理沙はニヤリと笑った

「おやおや、こんなところで眠ったら風邪を引いてしまうぞ？」

理沙はハヤテにそつと歩み寄り、強く抱きしめた

「悪く思わないでくれよ？私だって限界だったんだからさ……」

「君が悪いんだ。私をこんなに夢中にさせるから……私だけのものにしたって衝動が抑えられなくしたんだから……」

理沙は紅茶に入っていた睡眠薬で眠っているハヤテの唇にそつと自分の唇を重ねた

「愛してるよご主人様……」

理沙は恥ずかしげもなく言い、タイミングを計っていたように外に控えていたSPたちがハヤテを運び出し、理沙はメモを書き残して生徒会室から立ち去った

第二十九話（前書き）

え〜と……

これから軌道修正していきます（P.D. ;）

こんなに暗い感じにするはずじゃなかったんですこの物語は……

どうしてこうなった。――――

第二十九話

「伊澄」

呼び出されたナギは教室の戸を叩き、そつと中を覗いた

するとそこには誰もおらず、不気味でいかにもさわつてはいけまんよというオーラがにじみ出ている箱が一つ置いてあるだけだった

「な、なんだこれは……？」

ナギはいけないと分かっているでも自分の知的好奇心を抑えることが出来なかった

「中を見るだけなら……」

ナギはそつと箱の蓋に手をかけ、それをとった

蓋がはずれると辺りは真つ暗な闇に包まれ、箱から光が教室に溢れた。まるで星が散りばめられたかのような幻想的な光景にナギは息をのみ、思わず感嘆の声を漏らす

「おお……」

「どう？ 気に入った？」

見とれているナギの背後からいつ現れたのか、伊澄はナギに声をかけた

「伊澄！ これはおまえがやったのか！？」

ナギは興奮も冷めぬままに息を荒げて言った

「気に入ってくれたみたいで嬉しいわ。」

伊澄はナギに笑みを向ける

「ねえナギ？ …… もっと凄いものも見てみたくない？」

伊澄がそう囁くとナギは首を縦に振った

伊澄が指をパチンと一つ鳴らした

すると散りばめられていた星屑は消え去り、辺りが完全な闇に包まれた

「お、おい！伊澄！？」

暗闇が苦手なナギは不安そうに声を漏らす

それに対して伊澄は不適な笑い声をあげる

「フッフ、あなたに永遠の闇をプレゼントしてあげる。でも安心して。さっきの星空はちゃんと見られるわ。」

「……私の作り出した空間で。」

まるで魔物が呻くような音が響き始めた。空間が収縮を始めたのだ。周囲が暗闇でもはつきりと分かる。ナギには教室の壁が迫ってきているとはつきりそう見えた

物理現象を超越した何かを伊澄が引き起こしたことにナギは恐怖せずにはいらなかった

パラレルワールドでは自分の親友でさえも変わってしまい、さらには人ならざる力を持つてしまうのかと

「じゃあねナギ。一人でも達者でね。」

伊澄の笑みは冷たくナギに突き刺さった

「冗談だろ……？やめてくれ、やめてくれ伊澄……」

「ナギ……さようなら。」

ナギの言葉も虚しく伊澄は力を使い続け、ナギを闇へ葬った

第三十話（前書き）

節目の30話ですよ

＼（。°。°）／

継続は力なりと言いますが拙文は変わりませんな（^ω^；）

第三十話

「おい、起きろよもう一人の私。」

ナギはその声に聞き覚えがあつた。できればあまり聞きたくないその声の主ははつきりと分かる

「伊澄が動いたみたいだな。」

仰向けに倒れているナギが目を開けると、予想通り眼前に自分と同じというよりも自分自身の顔があつた

「お前の差し金か……？」

ナギは目覚めて間もないにも関わらずはつきりと分かる敵意を込めた鋭い視線を別ナギに向ける

「勘違いするな。これは伊澄の独断だ。私の意志じゃない。」

別ナギはどこか遠くを見るように視線をナギから放した

「まがりなりにもお前は私だからなここまでするつもりはなかったさ」

「私は……ただどな。」

そんな別ナギの言葉に耳を傾けつつもナギはゆっくりと体を起こした固まった体をほぐすため一度伸びをしてからようやく目覚めたナギ

はすぐにある異変に気がついた

「どうしてお前がここにいるんだ？」

別ナギがここにいることである

ここはパラレルワールドの伊澄（今後 別伊澄と表記）

の創り出した空間のはず、協力関係にある別ナギがここにいるのは
おかしいのではないか

ナギがそう問いかけると別ナギはゆっくりとその口を開いた

「いたんだよ。お前の世界にも、予想外だった……そいつは私たちが
入れ替わっていることに気がついていたらしい。」

異変に気づいていたのはもちろん元の世界の伊澄

伊澄は眠りにつかされている神父がすんでのところからの発した思念を受け取り、ことを理解した

自分の知っているナギが急に真面目になり、より積極的にハヤテにアプローチをかけていたり

もはや豹変といっても過言ではない状態に異変を感じていた伊澄がそれを疑うことはなかった

そこで伊澄は八葉の力を使い、ある術を施した

それは『ナギと別ナギを同調させる』こと

つまりはナギに何か起これば同様のことが別ナギにも起こるように仕組んだのだ

ナギが異空間に幽閉されたことで別ナギも幽閉されることになってしまった

という説明の大部分を省き、互いに同調してしまったということだけを伝えた別ナギはナギに向けて再び口を開いた

「これからどうする?」

「どうするって言うてもだな……」

ショックにうつむくナギに別ナギは言い放った

「私はここを出るぞ。どうにかして出てみせる。」

別ナギが力強くそう言うのと暗くなっていたナギは、住む世界が違うだけで自分自身もこうも違うものかと自分を嘲笑してスックと立ち上がった

そしてそれを見た別ナギは無言でナギに手を差し出す

「ここは一つ協力しようじゃないか。」

「……まあいいだろう。」

ナギもその手を取り、握手を交わす

自分同士、ましてや敵同士の奇妙な協力関係が生まれた

第三十話（後書き）

来週は諸事情により更新できるかどうか分かりません……
（．．ω．．）

第三十一話（前書き）

休み明けも戯言コーナー

俺と

彼女が

魔王と勇者で生徒会長

略して『おかま』ww

という電撃文庫の新刊がかなり売れてるらしいですね

欲しいんですけど近辺の書店にはおいてないし、密林では正規の四倍くらいのねだんになってたし

（…ω…）

第三十一話

ナギと別ナギのコンビはまったく変わり映えのしない無の空間をとりあえず調べてみようかと歩きだした

特に会話をするともなく反時間程が過ぎた。すると大きな門のようなものが見え、別ナギが口を開いた

「あそこに誰がいるみたいだな」

別ナギがそっけなく言い、ナギは目を凝らしよくその門を見てみるとそこにいたのは人と表現してはいけないものだった

「うわぁっ!」

ナギが驚き、その場に倒れ込んだのを見た別ナギもよく目を凝らしてみた

「あれは……ミノタウロスか？」

別ナギが見たものは上半身が闘牛のように猛々しく、下半身は筋骨隆々。さらに右肩から左足にかけて巨大な斧を携えた存在だった

その威圧的な風貌におびえるナギをその場に残し、別ナギは臆することなく門に向かっていった

「おい、そこのお前。」

「……………私は門番。門を通りたくば我が問いに答えよ。」

「答えられぬときはこの門を通ることは叶わず、私がこの場で処分する。」

別ナギの声も素っ気ないものだったが、それ以上に門番の声は機械的で冷たいものだった

しかし別ナギは自分が殺されるかもしれないというこの状況でも臆さず、門番の出す問題に備えていた

もちろん別ナギも天才といえる頭脳の持ち主なので

「余裕で答えられる。」と、そう思っていた

「問題……」

「山川流のライトノベル『鈴宮ハノレヒの憂鬱』シリーズ全巻を発売されたのが古い順に答えろ。」

「は……はあ!？」

別ナギはアニメやマンガ、ライトノベルなどのサブカルチャーもしくはクールジャパンなどと呼ばれるカテゴリーの知識には疎かった

従って門番の質問は意味すら伝わっていなかった

「（ら、らいとのべる？軽い小説って何だ？）」

「（文庫は言うまでもなくハードカバーだって大した重さはないぞ！？）」

「（それに山川流って誰だよ！？そんな作家知らないぞ！？）」

別ナギは焦り始めた

自分の知識量で答えられない問題はないとさえ思っていたが、出された問題は意味すら理解できない

別ナギは再び門番に目をやる。すると先程は微塵も感じなかった恐怖が押し寄せ、額からは嫌な汗がにじみ出た

言いようのない絶望感と死の恐怖に駆られて腰を抜かし、その場に

崩れてしまった

声にならない声が勝手に別ナギの口から漏れていく

その姿を見下すように門番はゆっくりとその口で時を刻み始めた

「3……2……1……」

別ナギはその時を止める術を持ってはいなかった

「時間だ。」

門番は刻み終わると機械的に斧を担ぎ、震える少女めがけてその腕を振るった

第三十二話（前書き）

なんだか主人公であるナギが二番手になりつつある……

ドウシテコウナッタ（・ω・）？

第三十二話

「待て!!」

後方からの声が門番にすんでのところで届き、振りおろされた斧は別ナギから数センチ逸れた大地を割った

冷や汗をかく別ナギに対し、門番は何事もなかったかのように斧を担ぎ直すと現れたナギに向けて口を開いた

「私は門番……」

「そんなことは見れば分かる!」

ナギは話し始めた門番の言葉を早々に遮り、別ナギに視線を移す

「どうなっている? どうしてコイツは攻撃してきたんだ?」

別ナギは未だに少し震えた声で経緯を絞り出すような声で話し始めた

話し終えた別ナギは不安げにナギを見つめていた

自分同様に問題が分からず困惑しているのだと思っていたからだ

『怖い』誰もが抱く感情だが、それを黙り込んでいたナギは吹き飛ばすように笑い始めた

「ふっ……ふははははっ!!」

いきなり悪役じみた表情になってしまったナギに別ナギは驚いたが、同時にその笑いからは恐怖ではなく、勝利するという自信が感じられた

「ハノレヒだったな。アニメ版はBD・DVDを共にコンプリート、原作は保存用、観賞用、布教用をそれぞれ三冊ずつ持っているこの私に答えられぬ問題などなあい!!」

ナギは門番を指さし堂々と真実はいつも一つであると言わんばかりに宣戦布告をする

「……………」

それを見る門番は別ナギの時とまったく変わらず機械的に時を刻み始めた

「助かった。ありがとう。」

「別にかまわないさ。」

もちろんナギは出された問題をものともせずにと簡単に答え、さらには各巻の見所などの知識も披露して門番を圧倒した

現在、ナギと別ナギは門をくぐり抜け木々が並び立つ道を歩いている

門を抜けた先には殺風景な世界からは一転して木々が生い茂る森のような場所が広がっていた

そして遠くには大きな城のようなものが見えたので、ひとまず二人はそこを目指し歩いていくのだ

しかし徒歩での移動ということもあり

「す、少し……休まないか？」

歩き始めてから数十分たった頃にナギが口を開いた

平坦な道ではあったが普段は運動を全くと言っていいほどしないナギには長距離の徒歩移動は辛く、ぜえぜえと息を荒く途切らせている

対して別ナギは汗一つかかず、涼しい顔をしている

「お前、体力無いんだな。」

「……うるさい、私は……頭脳派なんだよ。」

それ以降もぶつぶつ何かを言っているナギを無視し、別ナギは休めそうな場所を探した

すると道を少しはずれたところに小さな茶店のような場所が目に入っただけ

クレジットカードがこの世界でも使えることを信じ、二人は茶店に向かった

第三十三話（前書き）

I am bone of my sword .

Steel is my body , and fire is my blood .

I have created over a thousand blades .

Unknown to Death

Not known to life

Have withstood pain to create many weapons .

Yet , those hands will never hold anything .

So as I pray , ' Unlimited blade works ' "

昨日突然Fateにハマりました

第三十三話

「団子二皿お待たせしました。」

古風で穏やかな外見の店内は二人の予想とはまったく異なり、ジャズが流れるバーのような装いで二人の他には客はいなかった

さらに唯一二人以外に存在している人間は団子を持って来た割烹着を着た老婆であり、二人はジャズと割烹着という取り合わせに違和感を感じずにはいられなかった

「おまえの世界の伊澄はどんな奴なんだ？」

ナギはそんな感性の持ち主であり、今回の事件の黒幕というべき存在の別伊澄を少しでも知っておこうと別ナギに問いかけた

すると別ナギは表情を少ししかめて腕を組み、反応に困ったようにうーんと唸り始めた

その様子からナギは答えが出るまでにはしばし時間がかかると判断し、出された団子に手を伸ばして頬張って待った

「……あ、なかなかうまい。」

「アイツは私同様、綾崎ハヤテという男に惚れている。」

「……いや、伊澄の場合は心酔してるという方が正しいのかもしれない。」

ちょうどナギが団子を食べ終えたとき、別ナギは前触れもなく語りだした

「心酔している……？」

ナギは口元についていたタレを拭いながら別ナギの言葉に疑問符を浮かべる

「ああ、アイツはハヤテに言われたことなら何だって従うだろう。」

更に表情を強ばらせて別ナギはその言葉を紡いでいった

「あくまで仮の話だがハヤテに『死ぬ。』と言そう言われたならアイツはその場で自分の舌を噛みきることすら一切躊躇わないだろう……」

自分でそう言いながら視線を逸らす別ナギを見てナギは言いようのない思いを抱えていた

「一体どうしてそこまで……？」

その問いかけに少し間をおいて、静かに別ナギは答え始めた

「圧倒的な強さは人に恐怖を与えるが、同時に人を魅了するんだよ……」

別ナギの真剣な口調にナギは思わず唾を飲んだ

「あれは何年前だったかな……」

第三十四話（前書き）

くちと長い戯言く

『俺と彼女が魔王と勇者で生徒会長』
が絶版・回収になりましたね（・ω・）

絶版になったその日にはAmazonで約2万円の値が付いていましたが、そういうものやっぱ欲しくなるので遠方の書店を巡って手に入れましたww

内容は嫌いではありませんでしたが、数力所にバカテスの一文が使われていましたし、魔王はゼロっぽかったし……

仕方ないかと思われます。

第三十四話

5年前、鷺ノ宮家の令嬢である鷺ノ宮伊澄が何者かによって誘拐されるという事件が起こった

身代金目的ならばすぐに解決できたであろうその事件は私怨によって引き起こされた事件であったため、なかなか犯人の特定には至らなかった

結局事件が起こった日は犯人から何のアクションもなく、警察などの国家権力をフル稼働させても手がかり一つ発見できなかった

そしてそのまま数日が過ぎその事件は犯人から送られてきた一枚のDVDでようやく一歩進展した

そのDVDにはどこかに監禁され傷だらけになった伊澄の映像が永遠と記録されていたのだ

しかし本職である警察や名だたる探偵にその映像を見せても手がかりは掴めず、関係者には憤りが募っていった

だが鷺ノ宮家と縁のあった財閥の御曹司、まだ幼さの残った一人の少年がその映像を見たことで事件は大きく動くことになる

その日の夜の闇に紛れて少年は誰にも悟られることもなく、死の危険があることも省みずに少女の救出に向かい、その数時間後には衣服の汚れを除けば完璧な状態で綾崎ハヤテは伊澄を救いだし、鷺ノ宮邸に赴いていた

屋敷に戻った二人の衣服は血で紅く染まっていたが、伊澄は命に別状がない程度の傷で、ハヤテに関しては全くの無傷だった

ハヤテの証言から犯人達の居場所は発覚し、すぐさま警察が駆けつけた

その現場は意外にも屋敷からそう遠くない大企業の事務所ビルの一室だった

その企業は鷺ノ宮家と交流のある企業で仕事上の怨恨で事件に発展したものだと推測された

ビルの中では大柄な男たちが瀕死の状態が無惨に転がっていて、血塗れで呻くものもいれば声すらも上げることが出来ぬ者もいる死屍累々の光景

警察はひどく驚き、犯人たちはすぐさま病院に運ばれて処置が行われることになった

早い処置でどうか命は助かったが、医者の話ではあと少し遅れていれば出血多量で男たちの命はなかったとのことだった

このことに対し、まだ幼かった少年から返ってきた答えは「自分に危害を加えようとしたから駆逐した。」とシンプルなもの。さらに答える表情は少し笑みが含まれていた

伊澄によるとハヤテはその場に現れるや否やナイフや拳銃を手にする複数の男たちに素手で立ち向かい、鬼神のごとき強さで圧倒した命すら奪ってしまいそんな冷酷極まりない表情と他を寄せ付けない圧倒的な強さは伊澄を魅了したのだという

この事件をきっかけにして鷲ノ宮家などの関係者はハヤテに感服し、警察は年端もいかないハヤテの底知れぬ恐ろしさに警戒を始めた

第三十五話（前書き）

gggdをどうにかする方法はないものか……

思っているように書けない（ゝ・ω・ゝ）

第三十五話

「そんなことがあったのか……」

別ナギが話を終えるとナギは思わずつぶやいていた

別伊澄が過去に事件に巻き込まれたことにも驚きはしたものの、やはりハヤテのことが気にかかっていた

『冷酷』

まず間違いなく自分が思いを寄せる元の世界のハヤテには縁もゆかりもない言葉だろう

両親に借金を押しつけられたあげく、捨てられてしまったにも関わらずハヤテは優しくかった

しかしこちら、別世界のハヤテは優しすぎるのだ

それ故に自分や自分の大切な人に危機が及ぼうものならば、その元凶をためらいもなく駆逐する。機械のように冷たく、悪魔のように恐ろしく

たとえそれが相手の命を奪うことになるうとも何一つとしてためらわない

そう告げられてナギは別ハヤテに少しながらも確かな恐怖を感じ、やはり自分はこの世界に在るべきではないのかもしれないと思った
確かに自分は綾崎ハヤテという人に惹かれている。それはもはや好

意ではなく愛というべき感情だ

しかしこの世界のハヤテは綾崎ハヤテであり、綾崎ハヤテではないのだ

そう考えるナギの揺れ動いていた心中は徐々にだが、一方に傾き始めた

「近くで見ると意外とこの城小さいな。」

ナギの言葉に別ナギも同意し、うなづいた

店を出てからしばらく歩いた二人は城の前にようやくたどり着いていた

しかし近づけば近づくほどに遠近法の偉大さが二人の身に染みた

城はさしずめ三階建て住宅くらいの大きさだったのだ

最初は自分たちの目を疑った二人だったがやはりそこにあるのは二世帯住宅にちょうどよいサイズの三階建ての一軒家

二人は少々の失望感を抱きながらも城（仮）の扉に手をかけた

「おじゃまします。」

「誰かいませんかー？」

多少大きめの二人の声が玄関から宅内に響きわたった

しかし返答はおろか物音一つしない静かな空間は二人に対して妙な威圧感を放っていた

「……行こう。」

「そうだな。」

二人は靴を脱ぎ、綺麗にそろえるとひとまず目の前にある階段ではなく家屋の奥を目指した

第三十六話（前書き）

読んでくださっている方申し訳ございません！

どうかまだ日曜日なので

ギリギリセーフ！！ってことで

m (´・`ー) m

第三十六話

一階は大きな広間のような部屋の隅にいくつか小さな部屋があるだけで、人がいるような気配はなく、仕方がなしに二人は来た道に戻って階段をあがってみることにした

「なあ、あの部屋誰がいるんじゃないか？」

そんな二人の行動は正しかったようで、階段の先には一階とは違い居住スペースといった部屋がいくつか存在する空間が広がっていた。先程とは違って確かな手応えを得た二人は期待と不安を入り交じらせた感情を強めつつその足を伸ばし、二階の一室にひとときわ異彩を放つ部屋を見つけた。

その部屋はどうやら薄暗いようで扉の下の隙間からのぞく光が時折瞬いて見えている。

二人は軽くノックしてから静かに扉を開けた。

「お、ずいぶんと遅かったんだな。さしずめどこかで団子でも食ってたんだろっ?」

幸いにも眼前からは二人に対する敵意のようなものは感じられない優しい声が届いた

その声の主は二人の到着をあらかじめ予測していたのか、待ち望んでいたと言わんばかりに目を輝かせ、再生していたビデオテープを停止させた

「うつ……ここは……?」

リン・レジオスターはまるで深い眠りから覚めたようにその目を開いた

実際には眠っていたわけではなく別伊澄の術で別空間に転送させら

れていたのだが、リインの記憶はまるで切り取られたかのように欠落していた

自分が何者なのか、そういったことは覚えている。だが、何故自分はここで気を失っていたのか

それが思い出せない。皆目見当もつかない

リインは自身の記憶を取り戻すべく、順を追って行動を思い返そうとしたが、ふと目の前のビデオテープが目に残りそれをやめた

「こ、これは……」

「機動○土ガン○ムのテレビ放映バージョン……だと……バカな！打ち切られてしまったファーストのリアルタイム映像は希少なはず……」

人であつたが故に時に幽霊神父リインは脱線し、盲目になる。本来の目的も忘れてしまい目の前の希少価値に釘付けになってしまった

「つまりお前は目覚めてから時間も気にすることなくファーストを観続けているというわけか。……うらやましい。」

「ああ、私の体は眠らなくとも平気らしい。だから一気視聴もお茶の子さいさいというやつだ」

ナギの言葉に状況説明と軽い自慢を終えたリインは誇らしげにうなづき、その危機感を持たぬ表情を見て別ナギは嘆息した

第三十七話（前書き）

少々強引な展開になりつつありますが……許して下さいね（＾ω＾；）

第三十七話

結局適度に休憩を挟みつつファーストを見終えてしまった三人はハッとして我に返った

「そうだ……こんなことをしている場合ではなかった……」

「私たちはここから出る手がかりを探しに来たんだった……」

リンと別ナギは声を上げたが、ナギだけは黙り込んでいた

「おい。そろそろ何か手がかりを探さないと……」

「……そうだ。ワタルの家だ……」

別ナギが言葉をかけたそのとき、ナギは呟いた

しかし別ナギとリンはナギの言葉の意味を解することはできず首を傾げる

そんな二人を見てナギはああ。と納得の声を漏らし、話し始めた

「一階の広い部屋といい、この部屋、それにファーストのビデオテープ……」

「私の世界に限るのかもしれないが、この場所は私の知っている橘ワタルの家によく似ているんだ。」

そんな説明を受けて二人は少しだけ表情を強ばらせて うーん。と

唸った

「なるほど……こちらのワタルもお前の世界のワタルと同じなんだが、言われてみればその条件は当てはまるな。」

別ナギはナギの言葉に納得したように頷いて

「では、何かしらこの空間とそのワタル君の家は何か関係があるのかもしれないな……」

「……たとえばの話だが、空間の出入り口の関係であるとも考えられる。」

リインはいつにも増して真剣な表情を浮かべた

「まさかこんなにも早く気づかれるとは思いませんでしたよ。」

不意に三人の後方から声が響き、声の主は美しい黒髪を揺らしながらゆっくりと三人に近づいてきた

「そうです。確かにこの建物自体は私がこちらの世界のワタル君の家を基にして八葉の力を応用して形成しました。そしてこの場所は元の空間と唯一つながっている場所です。」

「ですが、あなたたちにはこの空間から脱出する術を持たない。この場所にたどり着いたところで意味は皆無と言っていていいでしょう。」

長々と言葉を紡ぎ、ようやくその足を三人の眼前で止めた別伊澄は張り付けたような笑みを浮かべた

「この場所から時々永遠にさまよい続けるあなたたちの様子を傍観するつもりでしたが……気が変わりました。」

別伊澄は目にも留まらぬ早さで何処からか札を取り出してそれを構えた

「出口に気づかれてしまったからには念には念を入れて、今すぐにこの場で消し去って差し上げますよ。」

自分に向けられた一片の曇りもない敵意に別ナギは声を荒げた

「どういうことだ！！裏切ったのか（別）伊澄！！」

リンとナギも口には出さなかったが鋭い視線を別伊澄に向ける

「（別）ナギ……ごめんなさい。少しばかり事情が変わってしまっただのよ。」

「……だからせめてここで私があなを永久の眠りにつかせてあげる。」

「他の二人とは違って消し去るなんてしないから……絶対に。」

別伊澄は苦悶に満ちた声を絞り出すように言った

第三十八話（前書き）

〔The 戯言〕

夏期の新アニメもチラホラ始まりだしましたが、

私は才オカミさんと七人の仲間たちに期待しています（＾ω＾）

原作も収集することも検討中です。

今回の内容とは一切関係ありません。……ハイ（・ω・）

第三十八話

「一体どういことなんだ（別）伊澄！！」

別ナギの声は別伊澄に届いてはいても、別伊澄は耳を傾けようとしていない

「八葉六式……撃破滅却」

別伊澄の手から放たれた札はまっすぐにリンに向かっていたが、手前で急に軌道を変えて数センチ横を通り、後ろの壁を抉りつつたように消滅させた

「（はずれた？……いや、これは……）」

札の軌道がある一点で突如変わったことに不信感を抱きつつ、別伊澄はさらに一枚札を構えた

「次こそは……はずしません。」

別伊澄は別ナギに視線を向けると小さく口を動かした

別ナギはそれを聞き取ることは出来なかったが、別伊澄の目から一筋光る何かがこぼれたのを見て近寄ろうとした

しかし

「……撃破滅却」

別伊澄のその一言でそれは叶わなかった

カツという音が鳴り渡り、別伊澄の放った札は三人、特にリインの眼前で突然速度を落とし、弾けて消えた

そんな目の前で起こったことに理解できない三人だったが、それ以上に驚いたのは別伊澄自身だった

「……どうしてこんなことが……」

力なく呟く別伊澄はガクリと膝を折ってその場に崩れさって手を付いた

その手は悔しそくに拳を握り、だがどこか心苦しそくに小さく震えていた

「（別）伊澄……」

別ナギは自分の親友の姿を見て悲しそうな表情を見せる

静寂の中、開け放たれていた窓から一羽の黒い蝶々が舞い込んだ

その蝶はまっすぐとリンへと飛んでいき額に止まると、そのまま中へと入り込んだ

「うあっ!!」

一瞬驚きから声を上げたリンだったが特に痛みはなく、すぐに冷静を取り戻した

そして自身が何故この場にいるのか、先程目の前で起こった事の真相を理解した

「（そうか……伊澄君助かったよ。）」

リンには足はないのだが前に一歩踏み出して別伊澄に語り始めた

「もはや君の成さんとしていることは叶わない。君よりも強い八葉の力がすべてを打ち砕く、もうあきらめるんだ。」

リンの言葉を受けて別伊澄は一度ビクリと体を反応させると、ゆっくりと立ち上がり再びリンに向き合った

「私はそれでもやらなければならないんです……」

別伊澄の表情は決意に満ちていながらもどこか躊躇っている。そんなものだった

「そうか……君はどうしてそこまで」

リインはここまで言いかけるとふと言葉を遮り、自分のうちに直接語りかけてくる声に耳を傾けた

「君がこんなことをする理由も聞いておきたかったが……そろそろ時間のようだ。」

リインが言い切ると空間そのものが光に変わったかのように思えるくらいの輝きが四人を包み込んだ

「おい神父！何がどうなってる！？」

「説明してくれ！」

ナギと別ナギは目の前で繰り広げられていたリインと別伊澄のやりとりを静かに見守っていたが、さすがに多少の身の危険を感じて声を上げた

「これは……まさか！？」

対して別伊澄もすべてを悟ったように声を上げた

「では、私たちはそろそろお暇させてもらおうでしょうか。」

リインたちの声はそこで途切れて聞こえなくなった

第三十九話（前書き）

あれ（^ω^；）？
ナギのキャラが……

第三十九話

ナギが目を覚ますとそこは異空間に転送される前に自分がいた白皇学院の教室だった

ただあくまで転送前であり、自分の帰るべき世界ではない。ナギは「戻るには戻れたが……」と小さな息を吐いた

「やはり私にはできない……」

ふと自身の真横から聞こえた声に反応し、振り向くとそこにいたのは別伊澄だった

「私の住むこの世界の住人でないとはいえ、やっぱり貴女は私の大事な人。貴女はナギだもの……」

別伊澄は力なく涙ながらに言葉を紡いでいく

「でも私がナギを消さなければハヤテ様が……」

「ハヤテ？ハヤテがどうかしたのか!？」

ナギは別伊澄の肩に手をかけて軽く揺する

揺れ動く別伊澄は小さく呟くような声で話し始めた

「ハヤテが朝風に捕まった!？」

「ええ。ハヤテ様ほどのお人でも油断はするのでしょうかね。」

「彼女が私に力を貸すふりをして利用しようとしていたのは分かっていた。けどまさかこんなことになるなんて……」

「私を消さなければハヤテを殺すか……」

ナギは表情を強ばらせて拳を強く握り震わせる

「彼女も巫女の端くれだった。だからこそ私が協力を仰いで計画を話してしまったのがそもそもの発端……」

別伊澄はスックと立ち上がり、表情を引き締めた

「たとえこの身がどうなろうともハヤテ様を助けてみせます。」

「あなたはここにいて。あなたがなくなってしまったらハヤテ様はきつと悲しむから……」

別伊澄はナギに背を向けて歩きだした

「……ふざけるな！」

ナギは声を荒げて別伊澄の袖を掴んだ

「私が消えたらハヤテが悲しむ……？」

「確かにハヤテは自分のために私がいなくなるなんてことがあれば、悲しむどころか怒りで自身を傷つけてしまうだろう。」

ナギは別伊澄を引き寄せ、両肩をガツシリと掴んだ

「だがそれはお前も同じだ！」

「私がいなくなっても。お前がいなくなっても。私の知るハヤテは……綾崎ハヤテという男は悲しむんだよ……！」

ナギは必死の形相で訴えかける

しかし、別伊澄は辛そうな表情を浮かべながらもナギの手を振り払

った

「……それは分かっています。」

「でも私の弱さがこの事態を招いた！だから私がかたを付けなければならぬの！！」

別伊澄は どうすればいいのかわからない。そんな表情をして頭を抱えた

「私が消えるか。ハヤテが死ぬか。答えはその二択だけか？」

頭を抱えてうずくまる別伊澄だったが、ナギの言葉が耳に届きゆくりと顔を見上げた

「たとえ神が答えをその二つに定めたとしても、私は絶対に第三の答えを、私もハヤテも助かる道を手にしてやるぞ！」

そつ力強く言い放ち、ナギは手を別伊澄に差し出した

「だが、それにはお前の力が必要だ。」

「私に力を貸してくれないか？」

差し出された手に戸惑っていた別伊澄だったが、業を煮やしたナギが無理矢理その手を掴み

そのまま手を引いて教室を後にした

第四十話（前書き）

作者、日々の戯言

夏休みという名のバイト月間に突入いたしました（＾ω＾；）

ただ、疲れではなく暑さで倒れそうです

第四十話

「なあハヤ太君。私の執事になる気はないか？」

「お断りします。僕には守ると心に決めたお嬢様がいますからね。」

ロープで手足を縛られて床に寝転がされているハヤテはそう言っ
て理沙に笑いかけ、その笑みを見て理沙は嘆息する

「君は本当にナギ君にご執心なんだな……妬けるほどに」

理沙は一度ハヤテの耳に自身の顔を近づけると息のかかる近さで囁
いた

「でもなハヤ太君。私は君が望めばいつだってあの子が出来ないよ
うなことをしてあげるぞ？」

「……君を満足させてあげられる自信はある。」

理沙は身動きのとれないハヤテの体に手を回し、ゆっくりと抱きし
めた

「手始めにまた君の唇を奪うとしようか。」

「……随分と積極的なんだね。理沙が僕のことをそんなに思ってい
てくれただなんて気づかなかったよ。」

ハヤテは身動きがとれないにも関わらず、余裕の表情かつ甘い声で
理沙に囁く

「ハヤ太君こそ余裕じゃないか。今から君は大好きなご主人様よりも私にぞっこんになるというのに……」

理沙がそう言った後、二人の唇は重なった

ハヤテの方から理沙に詰め寄る形で……

ナギと別伊澄は朝風家の神社にたどり着き、送りの三千院家の車を返し二人は顔を見合わせた

「お前のその超能力に少し頼ることになるが、頼めるか？」

「大丈夫よ。あなたもハヤテ様も死なないわ、私が守るもの……」

ナギはどこかで聞き覚えのある台詞に首を傾げつつも別伊澄の言葉に頷いた

「じゃ、行くか。」

「そうね。行きましょう。」

二人はハヤテが捕まっているという朝風家の地下牢へとその足を向けた

二人の行く手には黒服のSPが幾人も立ちふさがったが、すべて八葉の力の前では無力だった

別伊澄が威力を押さえて八葉をの力を振るい黒服たちを退ける

そしてその後を参謀という大役を担っているナギがついていくという布陣で二人はどんどん地下牢の最深部へと近づいていった

「あの角を曲がればハヤテ様が捕らわれている牢があるはずよ。」

そして二人は歩き始めてから十数分と経ったのを感じだした頃になつて、あと一歩というところまでやってきた

別伊澄はナギを始末した後に来るように言われていた場所にハヤテがいると確信していた

だからこそ迷いなくここまでたどり着くことが出来たのだ

そしてそれは間違っておらず、角を曲がった二人の目の端には理沙とハヤテらしき人物の姿が映った

「ハヤテー！！」

ナギはその瞬間に駆けだして別伊澄を抜き去っていった

第四十一話（前書き）

茅原実里のオールナイトニッポンRに聞き入っていて更新忘れるところだった

（^ω^ ;）

また内容がおかしな道に迷い込んだかも……

第四十一話

「ハヤテー!!」

勢いよく地下牢の鉄格子に手をついたナギは自分の目を疑った

「ハ、ハヤテ……お前……」

ナギの目にはハヤテに介抱されるように抱きかかえられている理沙の姿が映っていた

だがその表情は心ここにあらずといった様子で虚空をぼんやりと見つめ、頬はうつすらと朱に染まっていた

そしてハヤテはナギが声を上げた瞬間に少し焦ったような表情を浮かべた

「あつ！えつと……お嬢さまどうしてここに……？」

ハヤテの言葉に耳を傾けながらもナギは俯いて拳を震わせる

「お前が捕まったと聞いたから助けに来てやったというのに……」

ナギは怒りを込め、ジトツとした恨めしそうな目をハヤテに向ける

「……やっぱり私のような邪魔者は帰るとしようか。」

「ハヤテ様……このような状況でもお変わりなく……流石です……」

ナギは鉄格子の向こう側のハヤテを恍惚とした表情で眺める伊澄をよそに背を向けて歩きだした

「ま、待って下さいお嬢さま！理沙さんがこうなってしまった以上、この牢は外からじゃないと開けられないんですよ！！」

「うつさい！！ハヤテのばーかばーかばーか！！！」

怒り心頭の小さな主は必死に叫ぶ執事を無視してズンズンと足早にその場を後にした

帰りの車中でナギはブーツと流れる町並みを眺めていた

あの異空間に自分達は確かに長く、むしろ永く居た

ただ実際には三時間も経っていなかったのだ

パラレルワールドでは非科学的なことすらも起こってしまうのかとナギは嘆息する

「やはり私にこの世界は合っていないようだな……」

ナギは変わらずに外を眺めながら小さく呟いた

「……マリア戻ったぞ」

「お帰りなさいナギ。……あら？ハヤテ君は一緒じゃないんですか？」

「知らん！！」

ナギは吐き捨てるように言つと部屋の扉を力強く閉めた

それを見たマリアはやれやれと嘆息する

「まったく……役に立ちませんねえ朝風さんも……」

「もう少し（別）伊澄さんをうまく使つてハヤテ君を足止めしてくれると思つたのですが……」

「……これでは時間が足りなさすぎます。」

マリアは心底失望したように携帯を取り出してアドレス帳を開く

「もしもし、計画をパターンCに移行して下さい。」

「足止めはほぼ失敗です。ですので日本企業側からは断念し、直接本社付近の子会社から侵略を開始して行って下さい。」

マリアはフツと黒い笑みを浮かべる

「ではお願いしますねクラウドさん。私が綾崎グループを手に入れたあかつきには貴方も重役にして差し上げますから……」

ボタンと携帯が閉じられる音が部屋に木霊する

マリアは顔を引き締めるとナギの部屋へと向かっていった

「た、ただいま戻りました」

ナギの帰宅から数時間後、少しばかり疲労の色を伺わせる表情でハヤテは帰宅した

「おかえりなさいハヤテ君、今回は何をしたんですか？ナギはかなりご機嫌斜めですよ？」

マリアはすべてを知っていると云わんばかりににっこりと微笑む

「……また悪い癖が……」

そんなマリアの言葉が骨身に染みてズキズキと痛むハヤテはがっくりとうなだれる

「まあ夕飯までにはナギの機嫌を戻しておいて下さいね。ナギは今部屋にこもってラストラ。カーをやっているみたいですから……」

マリアはそう言い残してハヤテに背を向けて歩き出す

「マリアさん。」

対してハヤテは声をかけても立ち止まらなかったマリアに向けて話し続ける

「綾崎はそう簡単には渡しませんよ。」

「なっ……！？」

マリアが驚いて振り返るとハヤテはすでに背を向けて歩き出していた

「クラウドさんはそちら側でしたか……」

ハヤテは振り向くことなくマリアに軽く手を振った

とある休日（ナギ編）（前書き）

今回から少しの間、番外編？的な短編です

とある休日（ナギ編）

「お前から会いに来てくれるとはな。まあ上がってけよ。」

「いや……ただ返却に來ただけなんだが……」

「そう言うなよ。うまい茶が手には入ったんだよ。」

ワタルは私の後ろに回り背中をグイグイと押してくる

助けを求めて入り口の方に目をやると、

サキさんが微笑みながら本日閉店と書かれた札を下げ、中にいた客をみんな追い出している

……こんなことして大丈夫なのかこの店？

潰れたって私の責任じゃないからな！

こんなことになったわけは数時間前に遡る

私が部屋でくつろいでいるとじゃれあうタマとシラヌイが目にとま
った

いつもなら微笑ましいとしか思わないのだが、この時は違った。シ
ラヌイは何かを抱えていたのだ

よく見るとそれはワタルから借りていると思われるDVDのケース
であることが見て取れ、

無邪気に遊ぶシラヌイからそんなサ。ラ大戦のケースを取り返して
中を確認してみると

幸いディスクは無事だったのだが、……何故か湾岸ミッドナオトの
DVDが入っていた

「湾岸ミッドナオトは光速で走ったりはしない!!」

……いや待てよ、光速では走らないが高速では走るな……って、だ
からといって間違えないだろ普通。

この世界の私は何を考えてたんだ？

ともかく早いうちに返却しておかないとな、延滞していいことを
祈るばかりだ……

「おーいマリアー」

と呼んでみたところでふと思い出した

この世界ではマリアはポンコツメイドだったってことを……

ということはろくにお使いもできないんじゃないか？

「お呼びですかナギ？」

そんなことを考えているうちに部屋に入ってきたマリアは何故か涙目で、「お皿が……お皿が……」とぼそぼそ蚊の鳴くような声で呟いている……

「い、いや……何でもない悪かったな……」

……このマリアに頼めばDVDが木っ端微塵になると私の本能が告げている

ハヤテは出かけているようだし、クラウスは……どうだろう？

まあ自分で返しに行くとするかな

……車で

てなわけでワタルのところまでやってきたわけだが

外見から何から変わっているところが何一つとしてないように思える。妙に安心してしまふな

「まあ適當にくつろいで待っていてくれ。俺は茶を持ってくるからさ。」

ワタルはそう言ってそそくさと部屋を出ていってしまった

「適當にと言われてもな……」

漫画でも読ませてもらうかと手に取ったその時、部屋のドアが開き

「失礼しますナギお嬢様。」

サキさんは入ってくるや否やどこか神妙な表情を浮かべた

「今日は大事なお話がありまして……その……若の事で。」

そう言つてサキさんは後ろ手で部屋の鍵を閉めてしまった

「お話……聞いていただけますよね？」

「あ、はい……」

……どうしよう。サキさんが、
この世界のサキさんは……怖い

とある休日（ナギ編2）（前書き）

バイトとセミナー 満載の夏休めない満喫中ですww

とある休日（ナギ編2）

「話というのは何ですか？サキさん。」

机の対面に座るサキさんの鋭めの視線がなんだか怖い

「率直に言います。ナギお嬢様……」

「若と結婚を前提にお付き合いしてください。」

「いえ、むしろ結婚してください！法をねじ曲げて今すぐにでも！」

……あれ？どうした私の耳を始めとする諸器官たちよ。サキさんが言ったことが理解できないぞ？

まず聞き取れてないんだな。もう一回聞いてみよう

「あの……サキさん？今なんと……？」

「ですから若と結婚してください。」

……なんだこの人？年上だけと言っても大丈夫だろ……

バカじゃね？

「……あのサキさん話がまったくもって見えないんですけど……」

そう言うとしゅんと俯いたサキさんは少し経ってから口を開いた

「……ナギお嬢様。若がお嬢様に好意を持っているのはご存じですか？」

あまりにも真剣なサキさんの表情に私は深く考えずに頷いてしまった

「ではお話は簡単です。ここに婚姻届けがありますので……」

そう言うって唐突にサキさんはペンと共に差し出してきた

「ちよっ、ちよっと待ってくださいサキさん！！落ち着いて！！」

「これが落ち着いていられるかああー！！」

サキさんは突然叫んだかと思うと、おもむろに立ち上がり、私の後

るに回った

「若とお嬢様がくつつけば私は心おきなくう〜」

……あれ？なんだかサキさんの顔がやけに赤いような、それにちよつと酒臭くないか？

「私だってあらつくしたひ人がいるんれす！」

「ナギおじよふさまが若とくつつけば……わたひはわたひは……」

いきなり私の背中が重くなった。もちろん急に太ったわけではない
どうやら眠ってしまったサキさんがもたれ掛かってきたようだ

サキさんは酔っぱらってたのか……？

「ふい〜やつと開いたぜ。」

そんなとき鍵がかかっているはずの部屋の扉が開き、ワタルが顔をのぞかせた

その手には冷えてそうなお茶と茶菓子の乗ったお盆、それに加えて
針金がある

察するにピッキングだろう……自分の部屋をピッキングすることに

なるなんて思わなかっただろうな

「悪かったなナギ。サキの奴また仕事中に酒飲みやがったみたいでさ。変なこと言わなかったか？」

「い、いや別に……」

聞けばサキさんは私が来る前、仕事中でも関わらず一杯やっていたようだ

サキさんは少し特異な体質で酔いが回るのが遅いらしく、顔が赤らんだりするといった外面的特徴が現れるのが遅いらしい

ただその逆に内面的特徴が現れるのが比較的早く理性のリミッターが外れやすいそうだ

ワタル曰く客を追いつ出したのは酔っていたからとのこと、現に目覚めたサキさんは元の世界となんら変わりなく、何も覚えてはいなかった

「じゃ、私はそろそろ帰るよ。」

「送っていくか？」

ワタルのしつこいまでの申し出を断り、待たせていた車に乗り込み、店を振り返る

するとそこには律儀に手を振るワタルとお辞儀をしているサキさんの姿があつた……

「お帰りなさいませお嬢様。」

「ただいまハヤテ。今日はお前、どこに行つてたんだ？」

そう尋ねるとハヤテはわざとらしく視線を泳がせた

分かりやすい奴だな……さしずめ女とデートでもしてたんだろうな、まったく……

「ま、まあ……それよりお嬢様はどちらに？」

「む、私か？私は………ああっ！！」

D
V
D
返
し
忘
れ
た
.....

とある休日（ハヤテ編）（前書き）

けいおん！

の連載終了を知り、嬉しいやら悲しいやら不思議な気持ちです。

ダラダラ続けられるのは嫌ですが、もう少し読んでいたかったかな
あ……

（・ω・）

とある休日（ハヤテ編）

……どうも綾崎ハヤテです。僕は今渋谷のセンター街というところにいます

この手の場所はあまり得意ではないんですが……

「ちょっと何ぶつぶつ言ってるのハヤテ？」

「はい、ハヤテの分。」

差し出されたソフトクリームを手にとって口へ運ぶ

「……ありがとうございます。」

今、僕の隣にいるのが幼なじみの 西沢歩

ちなみに付き合ってはいませんか

特徴は普通であること。容姿も成績も思考回路も金銭感覚も何から何まで至って普通の女の子

お嬢様は彼女を初めて見たときにハムスターとあだ名を付けたが、
凄く似合っていると思う

そんな普通の彼女と自分で言うのもなんだけど僕と出会えたのは奇
跡に近いと言える

まあ僕と歩の出会いには長くなるので割愛するが……

「ねえハヤテ、次はあの店ね。」

「はいはい、分かりましたよプリンセス。」

今日は歩に呼び出されてここ、渋谷で買い物です

服が買いたいのなら一人でもいいような気がするんだけど……

荷物持ちが必要なんですかね？

「ねえねえ似合う？」

試着室というステージで行われる歩のファッションショー

無邪気に笑いかけてくれる歩といると僕はとても安らぐ

「うん。とっても似合ってるよ。」

「そう？ハヤテがそう言うならこれ買っちゃおうかな。」

もう一度試着室にこもり、着替え直した歩はパタパタとレジへとその足を向けた

会計は自分するのが彼女のポリシーだそうで、僕が払うと言っても彼女は頑なにそれを拒む

彼女のプライドはお嬢様と同じくらいに高いのだ

会計を済ませた歩は僕に荷物を預け、今日の最終目的地へと僕の手を引いていく

そろそろ辺りも夕焼けに染まり始めた。おそらくは今から向かうのだろう

海に見える公園

いかにも普通の彼女らしいお気に入りの場所

毎回顔を合わせると最後にはここに立ち寄って夕陽を眺める

ここから見える夕陽は何とも言えないような思いを与えてくれて何度見ても飽きがこない。いつまでも眺めていたいと思わせる

だから僕もこの場所が大好きだ

「今日は楽しかったあゝ付き合ってくれてありがとねハヤテ。」

「僕も歩に久しぶりにあえて嬉しかったよ。」

他愛のない会話を交わしながらも彼女は夕陽から視線をそらさない
そんな夕陽が海岸線に完全に沈んだのを確認すると彼女は満足げに
につこりと笑った

彼女には普通でないところが一つだけある。それがこの笑顔。この笑顔は僕の最愛の人のそれにも匹敵する程の破壊力を誇る

……思わず赤面してしまうが、暗闇に紛れさせて彼女にそれを悟らせないようにする

「じゃ、そろそろ帰ろっか」

立ち上がりそう言った彼女に同意し、僕も立ち上がる

「送っていいっか？」

「ううん、大丈夫。私の家すぐそこだし……もしかして送り狼狽い？」

「ちっ、違うよっ……！」

いたずらに微笑みながら手を振って去っていく彼女の背中を見送り、僕も屋敷へと足を向けた

僕が帰宅してから数十分後、出かけていたらしいお嬢様が帰ってきた

「お帰りなさいませお嬢様。」

「ただいまハヤテ。今日はお前、どこに行ってたんだ？」

実は僕が歩と会っていることは歩たつての希望でお嬢様には秘密にしている

「ま、まあ……それよりお嬢様はどちらに？」

「む、私か？私………ああっ！！」

いきなり叫んだお嬢様はいかにもしくじったというような表情をして、フラフラと部屋へと帰ってしまった

どうかしたのだろうか？

第四十二話（前書き）

隙間をぬってちびちび書き続けてます

が、終わらせるタイミングを見失ってる感が出てきました（＾ω＾；）

第四十二話

「明日あの人が白皇に来る!？」

白皇学院の理事長室で生徒会長 綾崎ハヤテ は驚嘆の声を上げた
その対面には理事長である 天王洲アテネ がムスツと不機嫌な表情で座している

「どうして早く言ってくれなかったのさ!？」

「今からじゃ僕逃げられないよ!！」

ハヤテは普段の冷静な姿からは予想もつかない慌てふためいた様子を見せる

そんな様子を見たアテネはゆったりと立ち上がり、ハヤテに近づきながら口を開いた

「私が伝えてあげようと思って呼んだのに遅れてやってきて、しかもいつの間にか帰っていた人はどこの誰かしら？」

「あ、えつと……僕です……」

アテネの表情は笑顔。だがハヤテの脳はそれを怒りの表情として処理する

「ハヤテ、どうかしたのか？」

帰りの車中でボーッと考え込むハヤテにナギは問いかける

そんなハヤテの答えはシンプルだった

「母さんが来るんです……」

「母さんって……ハヤテの母親か？」

ハヤテの答えにナギは複雑な心境を覚えた

パラレルワールドとはいえ容姿は元の世界と変わらないはず

つまりはナギは未だ見ぬハヤテの母親をその目にすることになるのだ

ナギがそんなことを考えているといつの間にかハヤテはその口を開いていた

「僕、あの人苦手なんですよね」

「母親なのか？」

ハヤテの物言いからナギはハヤテの母親は元の世界と違い、ハヤテを大切にしていると推測した

「なんていうか……天敵みたいな感じなんですよ……」

「……天敵？」

しかしハヤテ自身は母親が苦手だと暴露し、ナギを多少混乱させた

「それではお嬢さま、僕は二、三日ほど旅に出ます。」

「……は？」

自室でくつろぐナギにハヤテはキャリーバッグを引きながら言い放った

当然の事ながらナギは理解できずに目を丸くする

「ハヤテ君はお母様に会いたくないので逃げるそうです。」

「違いますよマリアさん。僕は急に仙台に行って牛タンを食べないと死んでしまうかもしれない、いやきつと死ぬ病にかかったんですよ。」

ハヤテはそう言っている間にもソワソワと小さく動いている

「じゃあ今すぐ病院に行って精神科医の診断を受けることだな」

ナギは冷たく言って再びPS。に目を戻す

「お嬢さまの了承も得ましたのでマリアさん、僕は……行ってきました！」

ハヤテは目を輝かせながら、呆れて物も言えなくなったマリアを横目に小走りで駆けていった

「うわああああ!？」

しかし、ここに来てこちらの世界のハヤテにも不幸スキルが備わったのか、屋敷内に少年の悲鳴が響きわたった

第四十三話（前書き）

もう九月ですね

時の流れてこんなに早かったわけ（^ω^;）？

第四十三話

「お久しぶりですねマリアさん、ナギさん。」

そう口を開いたのはナギが今まで目にしたことのない女性

子を産み、十数年間育てたようには到底思えないほど若く、美しく見えるその容姿はナギに率直に綺麗だと言わしめた

結果的にハヤテは屋敷の外に出ることなく二人の前に現れた

実の母親に手を握られ、引きずられたかのように執事服に皺を寄せ、

そしてはつきりとした拒絶の意志を表した陰鬱な表情を浮かべながら

「お久しぶりです。ハヤテ君のお母様。」

「ど、どうも……」

ナギは眼前の女性にたどしくお辞儀をし

「ただいま戻りましたお嬢さま、マリアさん……」

「……おかえり。」

そして情けない声を出す自分の執事に軽く嘆息する

「……で？母さんは何をしに來たのさ？仕事は大丈夫なの？」

立ち直るまで少し時間を要したハヤテは若干ムスッと不機嫌な様子で自身の母親に問いかける

「何って……そろそろいい時期じゃないかと思つて。」

「だから何が？」

ハヤテ母の言葉にハヤテだけでなく、近場で静観していたマリアとナギも疑問符を浮かべる

そんな三人を見て、ハヤテ母はさも当然のようにその口を開いて言つた

「ハヤテ君とアテネちゃんの結婚に決まつてるじゃない。」

何言つてるのこの子は……
と呟くハヤテ母だったが

当の息子とその主は

「な、なんだってー!？」

声を揃えて叫んだ

「結婚は白皇を卒業してからって話だったろ!？」

「何でこんなに急なのさ!？」

バタバタと慌てふためくハヤテだったが、それ以上にナギは口には出さずに内心だけで驚いていた

「（なつ、
な
な
な
な
な
な
な
な
な
な
あ
あ
！
？）」

「ハヤテが結婚するだとおー!?」

そんな二人とはまったく異なる理由で焦っている人物がいた

その人物は同じ部屋、すぐ近くでハヤテ母の言葉を聞いて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた

「（……今、綾崎と天王洲が一つになれば……くっ、まずいですわ……）」

マリアは先頃、無能の皮を被り続けながら秘密利に進めていた計画が他ならぬ綾崎ハヤテ自身に打破されてしまった

そして今日、畳みかけるかのように天王洲グループとの統合話が来てしまい、マリアの内心は最早焦りと呼べる程度の感情ではなかった

「（帝おじいさまに一刻も早く報告しなければ……）」

三者三様の驚きは三千院家に何かをもたらそうとしていた

第四十四話（前書き）

現実って時に受け止め難いものですよね……（、ω、）

第四十四話

その日の三千院家は普段以上に静かだった

ナギとハヤテは寝静まり、ハヤテ母はゲストルームに籠もっている
そんな屋敷でマリアは完全防音を施したプライベートルームの中で
電話をかけていた

その相手はマリアがおじいさまと慕い、育ての親である三千院グループ
現総帥 三千院帝

現在計画を進めているのはマリアであるが、綾崎グループを手中に
治めんと計画したのは他ならぬ帝である

「慌てるなと言われても落ち着いてなんていられませんわおじいさま！」

焦りから少々声を荒げるマリアとは対照的に帝から帰ってくる声には
微塵も焦りは含まれておらず、そのことがよりマリアを焦らせて
いた

「計画はすでに失敗したようなものですよ！？このうえ綾崎と天王
洲が一つになれば私たち三千院家の入り込む余地は……」

そこでマリアの言葉は途切れた

帝がゆったりと落ち着いた口調で紡いでいく言葉にマリアは言葉を失ったのだ

「し、しかし！」

帝の口からマリアに告げられたのはマリアにとっては衝撃的な方法しかしそれは帝にしてみれば最善かつ最良の方法である

仮にも親子と言っても過言ではない関係にある二人だが、あくまで主従の関係

主人とメイド

従える者と従う者

使う者と使われる者

興じる人間と盤上の駒

「……分かりました」

主人の命に逆らうことはメイドたるマリアには出来ない

通話を終えたマリアの表情は少し曇っていた

「これは二人の婚約を阻止するための策……」

「他に手段はありません……」

マリアは自分に言い聞かせるように小さく呟いてから眠りについた

「ハヤテ君にお話があります…」

次の朝マリアは朝食の準備をしていたハヤテに声をかけた

「話…ですか？」

マリアから発せられた声に普段と違った印象を受けたハヤテはゆっくりと振り返える

それは自然な流れだろう

しかし次の瞬間にイレギュラーはやってきた

ハヤテが振り返ったその瞬間に二人の距離が急に縮まり、朝日に照

らされた二人の影が重なった

流石のハヤテもこのようなあまりの超展開に思考が追いつけずに戸惑うばかり

しかしマリアはそつとハヤテの唇を解放すると辿々しい口調で話し始めた

「私、ずっと我慢してたんですよ…」

「あの日から…貴方がこの屋敷にやってきたあの日からずっと…」

「マ、マリアさん？」

マリアの目は潤み、今にも滴がこぼれ落ちそうになっている

「私が、私さえ耐えていればずっと一緒にいられる。そう思っていました……」

「でもこのままだと貴方はどこか遠くへ行ってしまう…だから……」

マリアが次に口にする言葉はハヤテにも容易に想像できた

「わがままだってことは分かってます……でも、それでも私はこれから貴方の側にいたいんです……」

「私を置いて結婚なんてしないで下さい……ハヤテ君、私は貴方が好きです。」

朝の光で隠れたマリアの表情をハヤテは窺うことができなかった

第四十五話（前書き）

けいおん！！終わっちゃったか…（´ω｀）

あとは番外編のみかあ……

第四十五話

「おはようございます。お嬢様」

ナギが目を覚ましたそのときに目の前にいたのはハルだった

ハルはてきばきとナギの制服を運び、早く着替えるようにと急かす
まだ瞼も重く、寝足りないナギであつたが、どうにもこの流れには
逆らえそうもないと悟り、渋々ながら着替えを始めた

朝食をとっていてナギはふと疑問を覚えた

「なあマリア、どうかしたのか？寝不足か？」

マリアは食器を食洗機にかけようとしていたようだが、ぼーっと窓
の外を見つめながらその手を止めてしまっている

今まででもぼーっとすることはあったようだが、どうにもこれは質
が違うように思えたのだ

そしてその証拠にマリアはナギの問いかけに答えてはいない

「早くしろよ。そろそろ行かないと遅刻するぞ」

「そうだな……」

ナギは気がかりではあるものの、千桜の言うとおり時間に余裕はあまりなかったので送りの車に乗り込み学校に向かった

「今日のマリアはなんだか様子がおかしくなかったか？」

「マリアさん……ですか？ いえ、特にこそう感じませんでしたか……」

教室についたナギは真つ先に人だかりの中心にいたハヤテの元に駆け寄って、そう問いかけた

しかしハヤテの返答はナギの考えとは異なり、特に感じたことはなかったという

「お前の考え過ぎじゃないのか？」

ナギの隣で千桜はそう言い、ナギに席に着くように促す

「先生そろそろ来るぞ」

「そうだな……」

ナギはどうにも嫌な予感がしていた

この世界のハヤテを取り巻く関係性が大きく変わってしまいそうな予感

言うなれば

『恋のライバルが増えた』

そんな予感をナギは感じ取っていた

同刻、白皇学院理事長室

そこでナギと同じ悪寒を感じ取っている人物がいた

「妙な感じですね……」

白皇学院の若き理事長 天王洲アテネ は学院の運営する行事予定に目を通しながら軽いため息をつく

「なんだ？アテネ、書類に不備でもあったのか？」

その近くで仕事を手伝っていた彼女の執事 マキナ は自分の主のため息に素早く反応する

その姿はさしずめ忠犬のようで、マキナは書類を手放し素早くアテネに近寄った

「なにやらまたハヤテに何か起こりそうな気がしてならないのよ……」

アテネは仕事の手を完全に止めて、マキナに紅茶を入れるように命じた

その後、紅茶で一息ついたもののアテネの妙な不信任は消えるどころか、むしろ増えたようだった

仕事も全く手に着かなくなったアテネはついに一度深いため息をつくと、その場に立ち上がった

「……マキナ、行きますわよ」

「だと思ったよ……」

アテネは執事を従えてある教室、ある少年の元へ向かった

第四十六話（前書き）

私はハヤテをどうしたくてこの小説を書き始めたんだっ
たか……

こんなのだっけか（^ω^；）？

第四十六話

「もうしわけありませんおじいさま……」

マリアはナギと千桜を見送った後、すぐさま帝に電話をかけていた。その声は本当に申し訳なさそうに絞り出すように発せられていて、マリアの表情もあまり明るくはない。

「私はどうやら填められたようです……」

マリアがハヤテに偽りの告白をすると、ハヤテは微笑を浮かべマリアに向けた。

対するマリアはその笑みが余裕から来るものだと思時に悟って警戒心を強め、少々重めの口調で話し始める。

「女の子の真剣な告白を笑うなんて酷いですよハヤテ君……」

「真剣ですか……なら、僕も真剣にお応えしなくてははいけませんね」

マリアの言葉を聞いた途端、ハヤテの眼差しが真剣なものに変わった

「僕も本当に心から嘘偽りなく貴女が好きです」

「許嫁がいる身なので不謹慎ではあるのですが、この気持ちはもう隠しておけません」

その言葉を聞いた瞬間にマリアはようやく気がついた

ハヤテのスイッチが切り替わったと

後悔の念に苛まれながらも徐々に距離を詰めてくるハヤテからマリアは目をそらすことができなかった

「初めて貴女に出会ったあの日、僕は恋に落ちた。貴女という女性はお嬢さまに負けず劣らず輝いていたから……」

「共にこの屋敷で過ごすようになってからも君に惹かれていったよ。聖母のように柔らかな笑顔、不器用ながらも温かな優しさ、そんな君に出会うために僕はこの屋敷にやってきた」

「……いや、生まれてきたと言っても過言じゃないのかもしれない……」

そう言っただけでハヤテはマリアの手にそっと自身の手を添える

「君が好きだ……マリア……」

逃げられない。マリアは率直にそう思った

軽くしか手を握られていないにも関わらず、ハヤテの手をふりほどけない

それはまるで自分の体がハヤテを受け入れてしまっているかのようでマリアは悔しかった

だが同時に、確実にハヤテへ予定外の感情が芽生えつつあるのも、その原因も理解していた

そしてその原因こそが三千院帝が綾崎ハヤテに目を付けた理由でもある

三千院帝は眼力、特に人を見る目というものに秀でている

帝は幼少期のハヤテを見て人を引き付ける魅力に長けていると感じ、ある仮説を立てた

「これが…ハヤテ君のプライマーフェロモン…?」

「さあ?何のことかな?」

帝はハヤテからは異質なフェロモンが発せられていると仮定した

それも女王バチが発する女王物質のようなフェロモン

あえて名づけるならば『皇帝物質』とでも言うべきか、人を魅了することに徳化したフェロモンが…

「僕の真剣な思いにそんな物は関係ないんじゃないかな？」

そう囁くハヤテの声の艶は次第に濃くなっていくようにマリアは感じていた

これ以上はまずい。

そうマリアは悟り、ひとまず作戦を中断しようと試みた

「ハヤテ君、わ、私は……」

だが、時すでに遅し

動きの鈍っているマリアに止めを刺すようにハヤテはゆっくりとマリアの後ろに回り込み、そっと抱きしめて耳元で小さく呟いた

「君の本当の気持ちは分かってる。それでも僕は君のことが好きなんだ……だから少しでも時間をくれないかな？僕は狙った女性は逃がさない」

「必ず本気にさせてあげよう…」

第四十七話

「……なんだろう？嫌な予感がする……」

一限目の世界史の授業を終えた途端、ハヤテはぼつりと呟いた

どうしてもこの場にはいけないと本能が警鐘を鳴らしているかのように焦りがどこからか溢れてくる

「ハヤテ君どうかした？さっきから妙にキョロキョロしてるけど……」

「妙にそわそわしているな。体調でも悪いのか？」

そんな挙動不審のハヤテに気づき、ヒナギクとナギは側に寄り声をかけた

しかし……

もう形振り構ってられない。

ハヤテは二人に気づいているのかいないのか、目線もあわせないままにそう呟いた

唐突に訳の分からぬ言葉を耳にし、戸惑うヒナギクとナギだったが、ハヤテはいきなり立ちあがり二人に向けてようやく言葉を発した

「お嬢さま、ヒナギクさん、先生に伝えておいてください。」

「……早退します!!」

文字通り吹き抜ける風のようにハヤテは走り去っていった

「……え？」

一連の出来事に思考が追いついていないナギとヒナギクだったが、すぐさまその理由は理解できた

「ハヤテ！どこですの！？」

学院の一教室に学院の理事長がやってきたのだ

しかも白皇学院の生徒会長であるハヤテではなく、天王洲アテネの許嫁、綾崎ハヤテ個人を何やらただならぬ雰囲気を纏わせて訪ねてきた

「ハヤテ君、なにしたんだろう……」

「さあな……また誰か毒牙にかけたんじゃないのか？」

二人は顔を見合わせ

「「はあ……」」

自分が好意を寄せる相手とはいえ、二人は小さく、呆れたように息を吐いた

「貴女たち、ハヤテが何処に行つたか知りません？」

アテネはハヤテの座席を知っていたのか、座席付近にいたナギとヒナギクに近寄り、尋ねた

しかし、両者ともにハヤテの行動に目を丸くしていたわけで、行き先など全く知らない

「私の癪が正しければハヤテはまた誰かに手を出していますわ……」

「つまらない女だったならばただでは済ましませんわ……」

ナギとヒナギクはそう言うアテネに少し違和感を覚えた

「怒つては……いないんですか？」

ナギがおそろおそろ口にするとアテネはきよとした表情を浮かべた

「怒る？どうして私が？」

「だって許嫁が浮気みたいなことをしてるし……」

アテネの言葉にヒナギクは返したが、アテネの答えは二人の予想を遙かに越えていた

「私の夫となる男ですから愛人の5人や10人、いて当然でしょう。愛人の数と男としての魅力は比例しますから」

「貴女たちもそうなのではないのかしら？」

放たれた言葉にナギとヒナギクはあるものを感じていた

『余裕』

自分が最も愛されていると分かりきっている

だからこそ何人愛人を作ろうが最後は自分のところへ帰ってくるという絶対の自信からくる言葉にナギは少々苛立った

しかしヒナギクは違った

「彼を諦めるつもりなんて微塵もないわよ？」

「貴女とハヤテ君の婚約なんて解消させてあげるんだから。覚悟してよねアーたん」

その宣戦布告とも言える言葉を受け取ると、アテネは軽く笑みを浮かべて二人に背を向けた

「行くわよマキナ」

「お、おう」

「…ハヤテの目に狂いはないようね」

去り際の呟きは誰にも聞こえない

第四十八話（前書き）

さあ、あと数分で

とある魔術の禁書目録？

が関西でも放送されるんですよ（＾ω＾）

待ってましたアアア

（。。（

ア！！

こんな戯言たれてる間もwkwkが押し寄せてきて頭がおかしくなりそうです（（（＾ω＾）（（（

第四十八話

早退という名目で一足先に屋敷に逃げ帰ってきた…もとい戻ってきたハヤテは真っ直ぐ、足早にある部屋へと向かった

自分の母親がいるであろうゲストルームへ

「いるんだろ母さん、入るよ？」

ハヤテは神妙な面もちでドアノブをひねった

「母さん？」

しかしハヤテ母の姿はそこにはなかった

部屋を見渡しても姿はなく、部屋を出て屋敷の中を探してみても、どこにもいる様子はなかった

「…………逃げたな」

ハヤテは再びゲストルームに戻り、小さく呆れた息を吐く

「だから母さんは苦手なんだよね、僕の人間関係をひっかき回して遊んでるんだから…………」

ハヤテの母親は根っからの恋愛シュミレーションゲームマニアである女性であるにも関わらず、二次元ではあるものの女性を攻略し、それに快感を覚えている

その熱の入れ様は凄まじく、移動の車中など隙が数分あると行っているほど

そんな彼女が母親であるからこそ、息子の綾崎ハヤテはこのような性格形成をされた

そしつ物心ついた頃から女性からの視点で女性に好かれる、喜ばれる接し方、仕草を教えこまれた結果

英才教育による高い能力と女性に対する軽薄さを兼ね備えた綾崎ハヤテは作られていったのだ

そんな育成、もとい成長を遂げたハヤテが中学校に入学した頃に彼女はふと思いたった

もっとおもしろい恋愛シュミレーションゲームがやりたいと

二次元ではなく、三次元で主人公に女の子を攻略させて楽しみたいと

彼女はまず主人公となるキャラクターを決めた

迷うことなど何一つなく、自分が完璧なまでに育成した愛息子を選び

メインヒロインには知り合いの大グループの令嬢 天王洲アテネ
を起用

後は二人を許嫁にして初期設定は完了

こうしてハヤテの母親は三次元恋愛シュミレーションゲームを開始
したので

自分の仕込んだ性格はまさに恋愛シュミレーション向きのものでは
るからして、ハヤテの周囲には次々と人が集まっていた

後は時の流れに任せれば自然とハヤテに思いを寄せる婦女子は増えて
いく

ハヤテ母はそれを傍観、時にハヤテに攻略させるキャラクターを増
やして楽しむだけ

ハヤテは知っている母が自分のもとを訪ねるときは攻略キャラクター
ーを追加する時だと……

「はぁ……」

ハヤテは深いため息をつき、ゲストルームを出た
そしてそこではち合わせた。新たに追加されたヒロインと…

「あ……マリアさん」

ハヤテが背後から声をかけるとマリアはビクリと体を震わせた

「ま、マリアさん…今日はその……」

ハヤテが言葉をかけようとしたとき、マリアは振り返って言った

「私は、ハヤテ君のことなんてどうとも思ってますん！」

「好きになんて……なってますんから!!」

捨て台詞を吐いてマリアは走り去っていき、取り残されたハヤテは再び小さく息を吐いた

ちなみにハヤテ母と三次元恋愛シュミレーションゲームを楽しんでいる人物がもう一人

三千院家現当主 三千院帝 こそがその人である

第四十九話（前書き）

禁書目録がおもしろすぎて生きるのがツライww

早く23巻が読みたいよオオオオ!!

かまちーの年収知りたいww

第四十九話

「まただ……マリアさんだけは手を出さないように気をつけてたのに……」

ハヤテは軽い目眩を覚え、フラフラと弱々しい足取りで自室に戻った精神的な疲労のせいかハヤテは自室の扉が妙に重く感じた

どうにか部屋に入り、中を見渡してみるとハヤテが普段使用する机の上に見慣れない手紙のような封筒を一つ見つけた

「何か置いてある……？」

ハヤテはその封筒を開けたくないと感じていた

しかし顔をあわせづらくなったマリアから送られたものかもしれないだから嫌な予感を必死に押さえつつ、ハヤテはその手紙の内容を確認すべく封を開けた

愛しの息子ハヤテ君へ

もう気づいているとは思いますが、一応書き残すという形で伝えておきます。

結婚の話……あれはまだまだ先です。

如何でしたか？

シナリオ お母さん

協力 S・M 爺

によるヒロイン追加イベント

今回のイベントをお楽しみに！

貴方の攻略対象

ヒロイン

(好感度MAX)より

「誰が母親を攻略するかアアアア!!」

「S・M 爺って誰だよオオオ！名前が狙いすぎてんだろぅがアアア!!」

普段の冷静な口調からは想像もできない荒々しい口調で叫びながら、そして頭をかきむしるようにしてハヤテは立ち上がった

息をゼエゼエと切らしてハヤテがふと後ろを振り返るとそこには咲夜が立っていた

「……へえ、マリアさんにも手だしたんかいな」

咲夜の表情は半笑いというところ

そこから察するにハヤテがマリアに何をしたのかすべて知っているように思えた

「い、いつからそこに？」

ハヤテは先ほどよりも遙かに嫌な予感を肌で感じながら問いかける

返ってきた答えはもちろん「最初から」

咲夜の言葉を耳にしたハヤテは額から汗を滲ませた

咲夜に弱みを握られるとロクなことにならない。それをハヤテはよく知っているからだ

「ナギが聞いたらどう思うやろな」

「ハヤテ兄ちゃんがマリアさんに無理矢理手出して泣かしたって言うたらどうなることか」

咲夜の浮かべたいたずらな笑みはハヤテにとって悪魔の微笑みに等しかった

「……何をすればいいんですか？咲夜様？」

「さすがハヤテ兄ちゃん理解がよくて助かるわ」

咲夜はいたずらな笑みを浮かべ、何かを企んでいるような表情でハヤテに耳打ちをした

第五十話

「メイド喫茶ひまわり……」

「最近見つけてな」

「わりと居心地いいし」

「通いつめているというわけだ」

ナギは生徒会三人娘こと 瀬川泉、花菱美希、朝風理沙に連れられ
メイド喫茶に来ていた

下校の際に車に乗り込もうとしたナギを見かけた三人（仕事はサボ
り）が声をかけ、そして半ば強引に押し切った形になる

形こそ連れてこられたというようになっているが、ナギは内心期待
に胸を躍らせていた

メイドは毎日のように目にしているが、一般的に知られているものとは少し違っている

だからこそマンガやアニメの中に表現される『メイド』を一度見てみたかったのだ

「じゃ、入ろっか」

泉が先頭に立ち、メイド喫茶ひまわりの扉を開けた

「おかえりなさいませ。お嬢様方」

開かれた扉の向こうにはナギの知らぬメイドの姿があった

「なにをしてるのだハヤテ？」

「「「確かに似合ってはいるけど……」」」

ナギが知っているはずもなかった

そこにいたメイドは他人が見れば確かに女に見える

だが、よく知る四人からすれば女装癖に目覚めてしまったクラスメイトの男子なのだから

「…何のことでしょうかお嬢様方？お席はこちらです」

ハーマイオニーという名札をつけたメイドは目を泳がせながら四人を席へと案内する

「ねえ、ナギちゃん。ハヤ太君ってそっちの趣味に目覚めたの？」

「少なくとも私は知らなかったが……そうかもしれないな」

「まあ、悪くないな」

泉、ナギ、美希と繋がった会話はわざと前を歩くメイドに聞こえるようにされていたため、そんな主やクラスメイトにメイドは心の中で涙を流す

「…そんな君もそるよハヤ太君」

ただ理沙だけは違い、ハーマイオニーに近寄って肩を抱き、そっと耳元で艶やかな声でささやいた

ハーマイオニーは先程よりも激しく心で泣いた

注文がお決まりになりましたらそちらのボタンを押して下さい
ごゆっくりどうぞ

と定型句だけを残してハーマイオニーは去っていった

席に着いたナギら四人はメニューを開く

「さて、今日は何を頼むかな」

「私パフェにしようっと」

「私はティラミスだな」

泉と美希はすぐに決めたが、ナギと理沙は決めかねていた

「お前ら決めるの早いな」私は……」

とそこで理沙は周囲を見渡し、店内の壁面、それもかなり大きく張り付けられている紙に目を付けた

「ナギ君、私と一緒にあれを注文してみないか？」

怪しいその理沙の声に促され、ナギは紙へと目を移した

第五十一話（前書き）

暴走気味な話つくろっかなと画策してます）。
。
；
（

第五十一話

ナギが理沙に促され、目をやった紙には

『第一回喫茶ひまわりコンビでクイズ大会』

と書かれており、それには勝者チームには商品ありとの文字も見えた

「やはり君と組むのが優勝への近道だと思うんだ」

注文というのはもちろん組んで参加しようという誘いだろう

ナギはハヤテ誘拐？の件があり、未だに理沙を疑っていたが、このような遊びに罫があるとは思えない

「まあ、いいぞ」

「決まりだな。ではエントリーするのでしょうか」

商品とは一体何なのか

ナギと理沙はそんなことを考えながらエントリーシートに名前を書き込んだ

メイド喫茶ひまわり控え室

そこで幾人ものメイドを侍らせ、イスに座る一人の少女がいた

この店の経営者である愛沢咲夜

彼女が年相応な無邪気な笑みを浮かべているのに対し、その正面で膝を折っているメイドもとい執事の表情は暗かった

「…で、咲夜様？僕はいつまでこの格好をしてればいいのでしょうか？」

その言葉からは主従関係であるような雰囲気は感じられず、嫌々ながらも従わされているといったものが感じられた

「まあ、よう似合ってるからそのままでええんちゃうの？」

「…お断りします」

よほど嫌なのだろうか即座に否定し、キツと鋭い視線を向けるメイド服の執事 綾崎ハヤテ

そんなハヤテを咲夜は恍惚とした表情で見つめていたが、一つ咳払いをして話し出した

「ハヤテ兄ちゃん、次が最後の仕事や」

「ナギにもて遊ばれなくなったら……優勝してきいな……」

咲夜はニヤリと不適に笑った

クイズとはいえ、メイド喫茶で催される程度、公立高校の教科書レベルで天才少女三千院ナギの敵ではない

そこは理沙の見立て通りだったのだろう。二人は順当に勝ち上がり、決勝戦に進出した

「次も頼むぞナギ君、商品はもう目の前だぞ」

理沙がそう言った瞬間に店内の証明がほぼすべて消えさり、マイクを持った一人の少女だけを照らし出した

「さあ、クイズ大会も決勝戦です。決勝戦は朝風・三千院ペアと当店のメイドさんチームで行います！」

「ちなみに決勝戦の実況解説はウチ、この店のオーナーである愛沢咲夜がつとめさせてもらいます」

咲夜の登場に多少の驚きを見せたナギではあったが、それよりも遙かに対戦相手の姿に目を奪われていた

「…負けない。たとえ相手がお嬢さまでも……」

そんなことを呟きながら闘志を剥き出しにしている自分の執事の姿に

「…なんだか、ハヤ太君すごくやる気だな」

さすがの理沙も若干ハヤテの気迫に気圧されているようで、ナギに
ささやく声に先程とは違い商品への渴望が失われているようだった

「む……」

ナギ自身もそれは同じだった

第五十二話（前書き）

次話はどうでしょうか（、ω、）

弾けてみてもいいですかねえ…（、ω、）？

第五十二話

結論から言うとナギと理沙は優勝した

その理由はクイズのルールにある

『5問正解で勝利』

だが重要なのもう一つのルール

『不正解の場合は相手のコンビが正解したこととする』

今回ナギと理沙のペアは一度も答えておらず、勝利できたのは五問連続でハヤテのペア、ハヤテの相方が間違えたためである

毎回ハヤテの相方は咲夜が選んでいるのだが、今回は

「はー残念でしたね。ハヤテさん」

「君がそれを言うかな……ねえ文ちゃん？」

メイド服に身を包んだ白皇学院の生徒 日々野文 であった

もちろん選考理由は「おもしろい」から

咲夜は文を初めて見たその瞬間に秘められた可能性、天性の天然に惚れ込み雇ったという

咲夜の見立て通り、文は問題が読まれ始めたその瞬間信じられないほどアブノーマルな反射神経で早押しボタンを押して回答権を得ると

「分かりません!!」

元氣よく五問連続でそう答えた

会場はもちろんナギと理沙は啞然とし、ハヤテは頭を抱えた

そして思惑通りにことが運び、ご機嫌な様子でその模様を眺めていた咲夜がつぶやく

「こんなときくらいしかハヤテ兄ちゃんの困った顔見られんからなあ」

そしてそんな主を側で眺めていた執事の二人、巻田と国枝は妙なところ、主に兄同然のハヤテに対してのみ発揮されるスッ氣に呆れて

いた

「何故お嬢様は綾崎様に対して、その…いじわる…ですかね？なさるのですか？」

そう巻田が尋ねると咲夜は何も答えることなく固まってしまった

「えっ、なんでってそら…あれや…その…そう。おもしろいからや」

妙に歯切れの悪い答えを返した咲夜に対し、今度は執事二人がにやけ顔を見せていた

「優勝商品は事実上綾崎様を自由にできる権利でしたね」

「あのお二方はどんなことを要求するのでしょうかねえ？」

巻田と国枝は主に語りかけているにも関わらずクールな表情で、言葉に少量の毒をはらませて続ける

「ナギお嬢様なら心配は無用でしょうが…あの朝風様はどうでしょうね」

「もしかするとすごい要求をするかもしれませんよ？」

咲夜はゴクリと音を鳴らし、唾を飲み込み

そしてその様子を見て二人はフツと笑いその場を去ろうとする素振りを見せた

「なっ、なんやすごい要求って!？」

「いえ、まだお子さまのお嬢様にはまだ早いかと…」

その巻田の言葉に咲夜はムツとし、二人を跳ねながら小突いた

「子供扱いするんじゃない!! うちはまだ大人や!!」

そう怒る咲夜に国枝が仕方なく耳打ちすると

「そ、そんなんアカアァン!!」

顔を真っ赤にして咲夜は走り去った

第五十三話（前書き）

一回更新お休みしてしまいました（´ω｀;）

最近ダメなんですよ…

空き時間をうまく使えなくなったというか

更新もゆつたりになりそうです

m (((m

第五十三話

「お待たせしました…」

立ち止まり、息を切らしながら私服姿のハヤテは目の前で笑みを浮かべた少女に謝罪をする

「遅かったじゃないかハヤ太君。私を待たせるなんていい度胸をしているな」

そう言いつつ歩き出す理沙をハヤテは慌てて追いかけた

ナギとの順番決めの真剣勝負（じゃんけん三回勝負）に勝利した理沙はハヤテにデートに連れていくように命じた

時間と待ち合わせ場所のみを理沙が指定し、あとはすべてハヤテに任せる

執事としてのスキルが完璧なハヤテにしてみればデートはよいものになる

そう考え、指定した電車でおよそ一駅の隣町で待っていた理沙だったが

ハヤテは時間になっても現れず、約束の時間を一時間過ぎてようやく姿を見せたのだ

何を隠そうこの綾崎ハヤテを熟語で表すと『完璧』である

しかし綾崎ハヤテを説明しろと言われると

『完璧』ただし執事服を着ているときに限る

となり、私服姿だと不幸を呼び寄せるスキルが発動してしまうのだ

ハヤテは内心で

呆れて帰ってしまったのではないか

などと心配していたのだが、理沙は待っていてくれたので安堵した

そして理沙も同時に安堵していた

「……来てくれないのかと思ったじゃないか」

「え？」

「いや何でもない。さ、今日はどこに連れていってくれるんだい？」

理沙の言葉にハヤテは私服姿であるにも関わらずまるで執事モードに切り替わったかのようにエスコートを始めた

「ここは…博物館か？」

理沙は目の前の建物を指さしハヤテに確認するように言い、そしてハヤテもそれを肯定する

「私を博物館に連れてくるとは…勝算はあるのかい？私には難しいことはわからないんだぞ？」

ハヤテは理沙の言葉にニツと笑った

「ええ大丈夫です。ただ単純に美しいものをご覧に入れます」

第五十四話（前書き）

……お久しぶりです（＾ω＾；）

どうにも個々の作品に割く時間にはらつきが始めてしまい、筆の進みにくくなった本作は一時更新停止という事態に…

今後の展開と終わり方を練り直してきましたのでゆっくりとですが再び更新していきます

よろしければ今後とも本作をよろしく願いますm（――；
）m

第五十四話

「……すごいなこれは」

理沙は頭上に輝く物を見上げて言葉を漏らした

そしてハヤテはそんな理沙を見て笑みを浮かべる

真つ暗な部屋の中で二人きり、ハヤテと理沙は寄り添い、天井に映し出された星を眺めている

ハヤテが理沙を連れて訪れたのは個室プラネタリウムを楽しむことが出来るという珍しい博物館

完全会員制であり、少々入館料やその他諸々は高めな設定ではあるがその分の満足感は得られると評判である

その証拠に少女は言葉を失い、頭上から注ぐ光に心奪われている

「すごい…すごいぞハヤ太君」

「こんなときには何と云えばいいのか分からないな」

もつと国語の勉強をしておくべきだったかな。とおどけてみせた理沙はふとあることに気がつく

先程からとなりに座る少年はまったく頭上を見上げていないばかりか、

ずっとこちらを向いてうつとりとしていないだろうか

「ハヤ…太君？」

理沙が声をかけるとようやくハヤテは頭上を見上げた

「綺麗ですよね…」

「そうだな…今度は本物の星も観てみたいものだ」

理沙は本心からそう思い、そう言ったのだが

「そうじゃないんだ」

ハヤテはその理沙の言葉をまるで否定するかのように口を開いた

「僕が本当に綺麗だと思うのは女性が感動したりすることで見せて

くれる笑顔さ」

「今、君が見せてくれたのは僕が生きてきた中でも至高のものだった…」

「ずっと側で見ていたい。理沙、君には僕の側でずっと笑っていて欲しい…」

「わがままな僕を許しておくれ…好きだ。理沙」

そつと寄せられる唇を理沙は拒まず、ゆっくりと目を閉じた

一方そのころ三千院家の屋敷内で小さな次期当主 三千院ナギは悩んでいた

明日は丸一日を使ってハヤテとデートをするということとで、どこに連れて行ってもらおうか計画を立てていたのだが、目的地をどこにするかという点で迷っていた

「またア。メイト…いや、それとも今回はゲー。ーズにしてみるか？」

また行ってみたいアニ。イトにしようか

それともまだ行ったことのないゲーマー。にしようか

その心は実に微妙なところで揺れ動いている

「まあ両方という手もあるんだが…それでは一カ所にかける時間がなあ…うゝむ…」

「お邪魔します」

そんな迷いを抱えて唸っていたナギの後ろの扉が開き、胸元を強調した大胆なドレスを身に纏い、髪は金髪縦ロールのあの人物が訪ねてきた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104i/>

不思議の世界のナギ？

2011年1月14日03時33分発行